

子どもたちに 聞かせたい創作童話 第47集



鹿 児 島 市
鹿 児 島 市 教 育 委 員 会 編
公 益 財 団 法 人 か ご し ま 教 育 文 化 振 興 財 団

子どもたちに 聞かせたい創作童話 第47集

鹿 児 島 市
鹿 児 島 市 教 育 委 員 会 編
公 益 財 団 法 人 か ご し ま 教 育 文 化 振 興 財 団

刊行のことは

鹿児島市と鹿児島市教育委員会、公益財団法人かごしま教育文化振興財団では、「子どもたちの夢をはぐくみ、美しい心を育てたい」という願いのもと、「子どもたちに聞かせたい創作童話」を募集してまいりました。

四十七回目を迎えた今回は、県内をはじめ国内四十一の都道府県から、第一部、第二部合わせて、過去最高となる三二十点のご応募がありました。また、年齢で見ますと、十代から九十代の方まで幅広い年齢層から、作品をお寄せいただきました。

「子どもたちに聞かせたい創作童話 第47集」では、ご応募いただいた作品の中から、特選、入選に選ばれた七作品をご紹介します。身近な日常を描いたものからファンタジーなものを取り扱った作品は、どれも子どもたちの夢をはぐくみたいという思いの込められたものになっております。

この作品集が、保育園や幼稚園、小学校等の教育現場のほか、図書館や公民館等のコミュニティにおいて、本の読み聞かせ等の読書推進活動に活用されますことを期待します。

また、市民の皆様が文芸活動の一環としてこの創作童話集を活用され、今後、未来を担う子どもたちの豊かな感性や優しい心をはぐくむ優れた作品を発表されますことを願っております。

終わりに、全国各地から応募していただいた方々をはじめ、作品を審査してくださいました五名の先生方、さし絵を描いていただいた五名の先生方、そして、この作品集の刊行にあたってご尽力いただきました関係者の方々に心より感謝申し上げます。

令和八年二月

鹿児島市
鹿児島市教育委員会
公益財団法人かごしま教育文化振興財団

目次

刊行のことば	1
「第47回 子どもたちに聞かせたい創作童話」受賞作品	4
第一部 特選 「キャベツのなかのちいさなともだち」	5
大場 莉桜	5
第一部 入選 「どんぐりで友達ができるよ」	17
村上 ときみ	17
第一部 入選 「ちいちゃんとピンクのエプロン」	34
鈴木 美雪	34
第二部 特選 「魚屋になりたかった猫」	46
村上 ときみ	46

第二部 入選 「空からのエール」	わしおちえ	62
第二部 入選 「光の窓 ルチエッタ」	山地正人	83
第二部 入選 「ながくび神社」	笹嶋友晴	99
総評		118
入賞作品の選評		120
「第47回 子どもたちに聞かせたい創作童話」募集要項		125
応募状況		126
選考委員・挿絵作家のご紹介		127

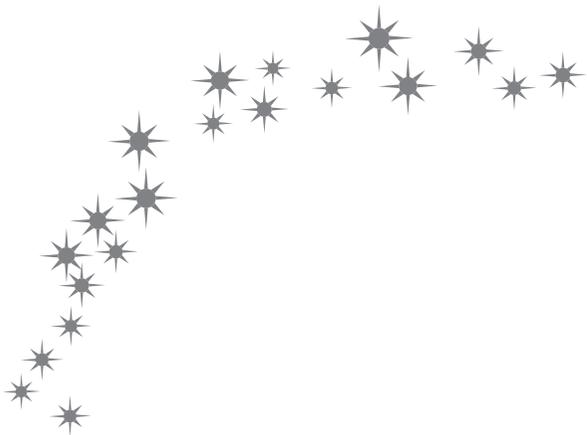
「第47回 子どもたちに聞かせたい創作童話」受賞作品

〈第一部〉保育園児、幼稚園児、小学校低学年を対象にした作品

特選	キャベツのなかのちいさなともだち	大場 莉桜	東京都
入選	どんぐりで友達ができるよ	村上 ときみ	神奈川県
入選	ちいちゃんピンクのエプロン	鈴木 美雪	千葉県
佳作	はねことば	奈村 直	奈良県
佳作	ぼく、おにいちゃんだもん	安藤 邦緒	岐阜県

〈第二部〉小学校中・高学年を対象にした作品

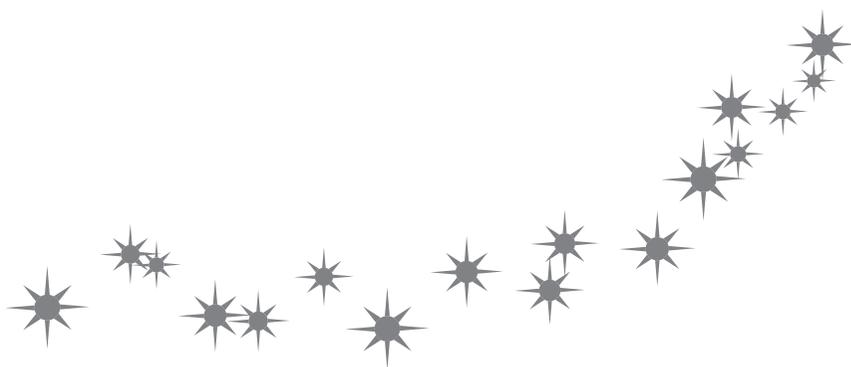
特選	魚屋になりたかった猫	村上 ときみ	神奈川県
入選	空からのエール	わしお ちえ	大阪府
入選	光の窓 ルチエッタ	山地 正人	大阪府
入選	ながくび神社	笹嶋 友晴	茨城県
佳作	牛乳ビンとおじいさん	下吹越 かおる	鹿児島県



第

一

部



キャベツのなかのちいさなともだち

大場おおば

莉桜りお

さくらがまんかいのはる、さきちゃんは五さいになりました。

そんなさきちゃんごはんをたべることも、おかあさんといっしょにごはんをつくることもだいすきです。

きょうのごはんはなにかな？

そんなことをかんがえていると、だいどころからおかあさんのこえがきこえてきました。

「さきくおひるごはんのじゅんび、てつだってくれる？」

まちにまったおひるごはんです。さきちゃんはいそいでだいどころにおかいました。

「きょうのごはんはなあに？」

「きょうは、さけとキャベツのクリームパスタよ」

「やったー！」

さけとキャベツのクリームパスタはおかあさんのとくいりようりのひとつです。わくわくしながらさきちゃんは、てをよくあらってキャベツをてにとりました。

「まずはキャベツをあらうね！」

そういい、さきちゃんはキャベツのそとがわの、すこしかたい、おおきなはっぱをとりました。すると、

「キヤアアアア！！！！」

さきちゃんはキャベツをおとしてしまうくらいびっくりしました。そう、そとのはっぱをめくるとそこにはちいさなちいさなあおむしがいたのです。

「まま！ あおむしが！ あおむしがいるー！！！」

さきちゃんはどしーんとしりもちをつきました。しかしおかあさんはおちついていません。

「だいじょうぶよ。あおむしさんがついていたってことはそれだけおいしいキャベツってことだからね」

そういい、あおむしを、からのむしかごのなかに入れました。



「ほら、きをとりなおして、さっそくおひるごはんつくろ」

そうおかあさんはいいました。しかし、さきちゃんはもう、おてつだいができるようなきぶんではありません。

「もうキャベツ触りたくない！」

キャベツはおかあさんにまかせて、さきちゃんはパスタをゆでるおてつだいをすることにしました。

ぐつぐつぐつぐつ。

ざくっざくっざくっざくっ。

さきちゃんはパスタをゆでるおとや、おかあさんがキャベツをきるおとがだいすきです。おかあさんとおひるごはんをつくっていると、だんだんきぶんもよくなっていきました。

「かんせい！」

ぶじに、さけとキャベツのクリームパスタがかんせいしました。ランチヨンマットをして、フォークをよういするところまでが、さきちゃんのしごとです。あとはおかあさんがのみものごはんをよういしたら、ようやく、おひるごはんをたべるじかん。てをあわ

せて、せーの、

「いただきます!」

「キャベツ、あまくてすっごくおいしい!」

さきちゃんはおいしくてなんども、なんどもおかわりをしました。

「はあくおいしかった!」

すると、おかあさんは、

「このあおむしさん、せっかくキャベツにくつついておうちまできてくれたから、そだててみない?」

そう、さきちゃんにききました。

さきちゃんはとてもまよいました。なぜなら、さきちゃんはむしがとってもにがてだからです。ちらりとあおむしのほうをみると、あおむしさんもむしかごのなかからこちらをみているようにかんじました。このまま、おそとにがしてしまうのも、なんだかかわいそう、そうおもい、さきちゃんはきめました。

「わたし、がんばってあおむしさん、かう!」

「このあおむしさんはモンシロチョウのあかちゃんなのよ。がんばっておせわしましょう

ね」

そうおかあさんがいうと、さらにやるきがでてきました。

「このあおむしさんがちようちよになるなんて、わくわくする！」

さきちゃんは、むしはとってもにがてですが、ちようちよだけはだいすきです。

「おなまえは、どうしようかな、モンシロチョウのあかちゃんっていつてたから：モンちゃん！ モンちゃんにしよう！」

きれいなちようちよになるといいな。そんなことをかんがえながら、パスタに使つかわなかったきれいなキャベツをすこし、ちぎってむしかごのなかにいれることにしました。でも、むしかごをあけてみると、やっぱりこわい。あまり、むしかごを、ながいじかんあけているのもいやで、ぽいっと、なげるように、むしかごのなかにいれました。そして、すぐにぱたんとむしかごをしめます。おそろおそろ、むしかごをのぞくと、モンちゃんはキャベツのうえにのり、むしやむしやとたべています。

「わたしがあげたキャベツをおいしそうにたべてる！」

なんだかとってもうれしいきぶん。

「モンちゃんはキャベツがいいに、どんなものをたべるんだろ？」

「むしかご、かわいくかざりをつけたらよろこんでくれるかな？」

さきちゃんももっともっと、モンちゃんについてしりたい！ そうおもいました。

「よーし！ モンちゃんがすきなたべものについてもっとしろうー！」

つぎのひ、モンちゃんのすきなたべものをしるために、キャベツと、おかあさんがスーパードでかってきてくれたこまつなど、はくさいをあげてみました。ごはんをあげるのにもなれてきて、すこしのじかんなら、むしかごのふたをあげていたってへいきです。

「こまつなどはくさい、たべてくれるかな？」

はじめてあげるたべものなので、さきちゃんはどきどきです。モンちゃんはゆっくり、ゆっくりと、こまつなにちかづいて、むしゃ、むしゃとたべはじめました。すこしして、こんどは、はくさいのほうにもちかづきます。むしゃ、むしゃ、はくさいもたべてくれました。

「よかった。たべてくれた！」

さきちゃん、ほっとひとあしん。まだまだじーっとモンちゃんをみていると、キャベツのほうにゆっくりちかづいてむしゃむしゃ、むしゃむしゃ、きづいたら、キャベツはぜーんぶ、たべていました。

「モンちゃんはキャベツがいちばん好きなんだ！」

モンちゃんのことをしれて、うれしくて、おかあさんにも、つたえました。おかあさんは、

「モンちゃんはキャベツがだいすきだから、キャベツにくっついてうちにきたのかもしれないね」

なんだかそれがおもしろくて、ふたりでふふふ、あははとわらいました。

つぎのひ、モンちゃんのおしかごのなかをすごしやすくするために、はっぱや、きのえだをいれることにしました。あさ、はやくから、おかあさんといっしょにこうえんにいき、モンちゃんのことをかんがえながら、せつせと、えだやはっぱをあつめました。

「よし！ これだけあれば、きつと、モンちゃんがすごしやすいおへやになるね！」

さきちゃんは、はやくモンちゃんのいる、おうちにかえりたくて、ずーっと、はやあるき。おうちについたらすぐに、モンちゃんのおしかごをあけます。

「ずいぶんとなれてきたじゃない！」

おかあさんがおどろいていると、さきちゃんは、

「あたりまえじゃん！ モンちゃんはともだちだもん！」

といいました。さきちゃんは、むしろはきらいでも、モンちゃんのことはいすきになりました。そして、こうえんでがんばってあつめたはっぱやきのえだを、モンちゃんのおむしかごにいれてあげました。

さきちゃんは、

「どう？　すごしやすくなった？」

と、モンちゃんにききました。とってもすごしやすくなったよ！　そういつているようなきがして、さきちゃんは、とってもうれしいきもちになりました。モンちゃんをそだてはじめから、なのかめのあさ。さきちゃんは、いつもどおりモンちゃんにキャベツをあげました。しかし、モンちゃんはいあまり、キャベツをたべません。

「あれ？　モンちゃん、あんまりげんき、ないみたい。モンちゃん、どうしちゃったんだろ？」

すると、おかあさんがいいました。

「モンちゃんはね、ちょうちよになるために、いまはすこしやすんでるんだよ。モンちゃんがサナギになってそこからでてきたらちょうちよになるんだよ」

「そうなの!?　じゃあ、モンちゃんは、だいじょうぶなんだ！　よかったよ」

「モンちゃんがちゃんとサナギになって、きれいなちようちよになれるように、がんばっておせわしようね」

「うん！」

モンちゃんは、むしかごのなかのえだやはっぱをどんどのぼり、サナギになりやすいところにいきます。

「きれいなちようちよになりますように！」

さきちゃんは、モンちゃんがサナギになってからもまいにち、やさしく、みまもりました。

モンちゃんがサナギになってからみっかがすぎました。すると、サナギのさきが、めり、めりめりとやぶけてきました。

「モンちゃん！ サナギから出てくる！」

すこしずつ、あたまがでてきて、体からだがでてきて、モンちゃんがサナギからでてきました。

「ここまで、ちゃんとそだててくれてありがとう！」

モンちゃんは、そいいながらうーんとはねをのばしています。

「モンちゃん、とってもきれい！」



さきちゃんがモンちゃんにいうと、モンちゃんはうれしそうに、はねをパタパタさせています。

そして、モンちゃんはいいました。

「わたしはこれから、おそとのせかいで、いきっていくの。だから、きょうでもう、おわかれ。さびしいけれど、さきちゃんのこと、ぜったいにわすれないからね」

さきちゃんはさびしいけれど、それでも、えがおで

「じゃあ、おみおくりするね！ わたしのおうちにきてくれて、ほんとうにありがとう！

モンちゃんといっしょにすごせて、たのしかったよ」

もう、さきちゃんはむしぎらいではありません。ゆびさきにちよこんとモンちゃんをのせて、げんかんをでました。

「またね、モンちゃん！ げんきでね！」

「そだててくれてありがとう」

モンちゃんはパタパタとはねをうごかし、そらをとびました。

どんだんちいさくなっていくモンちゃんにむかって、さきちゃんはてを、ふりつづけました。

どんぐりで友達ができるよ

村上
ときみ

「みどりがいっぱい、気持ちいい」

九月のある日曜日、木村先生はくぬぎ山にやって来ました。

木村先生がはたらいている市立第二小学校から、電車で四十分ほど来たところでは、

新米の木村先生にとって、来月の遠足ははじめての行事。心配になって、一人だけで

下見に来たのでした。

坂道をくだっていた木村先生が、

「みんな、楽しんでくれるといいな」

こうつぶやいた時、

「おーい、ぼくのどんぐり。ぼくのどんぐりまっておくれー」

後ろから、大あわての声が聞こえてきました。

びっくりした木村先生がふりかえろうとしたしゆんかん、足もとを大きなどんぐりがコロコロころがって行きました。

「あつ。まって、まって」

木村先生も、すぐにおいかけはじめます。

どんぐりはしばらくころがっていましたが、道のわきの大きな古い木の切りかぶにコツンとぶつかって、ようやくとまりました。

「ふう。やっと、とまった」

木村先生がどんぐりをひろい上げ、Tシャツのすそでふいていると、タツタツとかけてくる足音がしました。

「はい、これ」

どんぐりをわたそうと、ふりかえった木村先生の動きが、ピタリととまります。

「ありがとうございます」

と言うその子は、どう見ても子だぬきだったからです。

木村先生のまんまるの目と、ぽかんと開いたままの口を見て、

「あつ。しまった」



というような顔を、子だぬきはしました。

「むちゅうでおいかけているうちに、本当のすがたにもどっちゃった」

子だぬきは、はずかしそうに下を向きます。

ハツとした木村先生が、

「大切などんぐりなんでしょ」

と言い、もじもじしている子だぬきの手をとると、どんぐりを手の平におきました。

「うん。やっと見つけたんだ」

子だぬきが、手をきゅつとにぎりしめます。

すると、その時、

「うふふふ」

遠くの方から、女の人たちのわらい声が聞こえてきました。

「おっと」

子だぬきはあわてて、くるんと一回ちゅうがえりをします。

するとそこには、目のくりつとした小学三年生くらいの男の子が立っていました。

「まあ、すごい」

木村先生は、とてもおどろきました。

「わたしは、木村みさき。小学校の先生をしてるのよ。君のお名前は？」

「ぼく、カン太」

「かわいいお名前ね。ねえ、カン太君、ここにすわって、少し休みましょうか」

木村先生とカン太は、大きな木の切りかぶにいっしょにすわりました。

「はい、おやつ」

リュックサックからビスケットをとり出すと、木村先生がカン太にわたします。

「これ、なあに？」

「ビスケットよ。あまくておいしいの」

木村先生が、おいしそうにサクサクツと食べるのを見て、カン太もおそろおそろ一口かじりました。

「ほんとだ。おいしいね」

カン太が、にこっとわらいます。

「そのどنگり、とっても大きいね」

「だって、この山で一番大きいどنگりをさがしたんだもん」

カン太は、とくいげです。

「なるたけ大きなどんぐりを見つけておいでって、きつねのおばあちゃんが言ったから」
カン太は、どんぐりを手の平の上で、コロコロところがしました。

「どうして、大きなどんぐりが必要なの？」

木村先生は、ふしぎそうにたずねます。

「今度の満月の夜、きつねのおばあちゃんがどんぐりを友達に変えてくれるんだ。できるだけ大きなどんぐりじゃないと、ぼくと同じくらいのおおきさにはならないんだって」

カン太は、うれしそうにどんぐりを見つめます。

「どんぐりが、お友達になるの？」

「そう、友達になるんだよ」

カン太の目が、きらつとかがやきました。

「カン太君、お友達・・・いないの？」

木村先生が、心配そうにたずねます。

「前までは、いっぱいいたよ。でも、山が荒らされて住みにくくなったんで、みんな、もつとのおくの山へ引っこして行っちゃったんだ。この山にのこっているのは、少しだけ。うち

は、おじいちゃんの足あしがわるいから、引ひっこせなくて・・・」

カン太は、ちらりと悲かなしそうな顔かおをしましたが、

「でも、このどんぐりが友達ともだちになるから、だいじょうぶ。さみしくなんかないよ」

そう言ういと、カン太は、どんぐりをきゅつとおねにおしあてます。

「そのお友達ともだちと、おしゃべりしたり、あそんだりできるようになるのね」

木村先生きむらせんせいが、にこっとわらいながら言ういと、

「ううん」

と、カン太は首くびを横よこにふりました。

「話はなすことは、できないみたい。けれど友達ともだちができたらね、この山やまをいっしょに歩あるきまわるんだ。カニがたくさんいる沢さわや、いつも一番いちばんさいしょに花はながさく桜さくらの木き、あたり一面いちめん青あおくなる、オオイヌフグリの花はなも見みに行くんだ」

カン太が楽たのしそうに話はなすので、木村先生きむらせんせいは少すこしほっとしました。

「カン太君たくんは、山やまのこと、よく知しってるのね」

木村先生きむらせんせいはカン太たの顔かおをのぞきこんだ後あとで、いいことを思おもいついたというように、

「そうだ！ 遠足えんそくで、またこのくぬぎ山やまに来くるの！」

早口で、話しはじめました。

「今日からあと三十日ねたら、お昼前に、この切りかぶでまっついていてくれるかな。私のクラスの生徒たちをつれてくるから、山のことを教えてあげてほしいの」

「わあ、楽しそうだね。うん、まってるよ。あと三十ねたら、この切りかぶだね。楽しみだなあ」

カン太は、わくわくしていました。

「一個、二個、三個、四個・・・十個。やっと十個あつまった。でも、まだまだ」

カン太はうれしそうに、つやつやのどんぐりの実を見していました。

先生と出会った日から、カン太は毎日どんぐりの実を一個ずつひろってきては、家の中にならべていました。

きれいなどんぐりをたくさん見つけた日には、二個も三個もひろいたくなりましたが、

「ダメ、ダメ」

カン太は首をふりながら、こう言いました。

「毎日一個。どんぐり一個。どんぐり三十あつまって、三十ねたら、切りかぶへ行くんだ」

そうして、何日もすぎでいき、丸い形や細長い形の三十個のどんぐりがあつまりました。

お日様が、ほっこりあたたかな日です。

市立第二小学校の生徒たちは、くぬぎ山へと出発しました。

カン太も人間の子にばけると、まちきれずに、ずいぶん早く、先生とやくそくした切りかぶへと向かいました。

そして、どれくらいまったでしようか。

道の向こうの方から、さわさわと、たくさんの子供たちの声が聞こえてきました。

大きな声でおしゃべりしている子。

歌を歌っている子。

ふうふうと、息を切らしている子。

おおぜいの子供が、通りすぎて行きます。

切りかぶにこしかけて、カン太はキョロキョロと木村先生をさがしました。

そして、キョロキョロしすぎて、目がくるくる回りそうになった時、

「カン太くん」

と、木村先生の声がしました。

カン太はすくっと立ち上がり、大きく手をふります。

木村先生の後ろでは、二年三組の子供たちが手をふっていました。

「カン太君。しようかいするわね。この子たちが、私のかわいい生徒よ」

「せーの」

男の子が大きな声で合図すると、

「こんにちは！」

三組のみんなが声をあわせて、元氣よくあいさつしました。

カン太も、はずかしそうにペコリとあいさつします。

「こちらが、この前お話したカン太君。今日からは、みんなのお友達です」

木村先生が、にこにこしながらカン太をしようかいしました。

「えっ。友達？」

木村先生は、目をぱちぱちさせているカン太のかたをトンとたたき、

「さあ、みんなでいっしょに、山の頂上を目ざしましょう」

と、言います。

「カン太君は、この山のことを、何でも知ってるのよ。わからないことがあったら、しつもんしてくださいね」

「はい」

こうして、元気な二年三組の子供たちにまぎって、カン太も山の中を歩きはじめました。

「ねえ、カン太君。あそこにさいてる白い小さなお花はなあに？」

女の子が、カン太に話しかけました。

「あれは、マツカゼソウ。どくがあるから食べられないんだ。でもあっちの白い花、ノギクの若葉は、春に食べるとおいしいよ」

「カン太君、カン太君。じゃ、あの小さくてたくさんある赤い実は食べられるの？」

「あれはガマズミ。食べられるけど、すぐくすっぱいんだ」

カン太が口をすぼめます。

その顔がおもしろくて、みんながわっとわらいました。

子供たちが、次々にカン太にしつもんしますが、毎日歩いている山なので、カン太にわからないことはありません。

カン太は、すっかり二年三組の子供たちとなかよしになりました。

山の頂上につくと、みんなといっしょにお弁当も食べました。

カン太のお弁当は、木村先生が作ってきてくれた大きなおにぎりでした。

それから、また歩いて切りかぶまでもどって来ると、木村先生が足をすつとめしました。

「さんねんだけど、カン太君とはここでおわかれです。カン太君のお家は、ちがう方向だから」

木村先生のさびしそうな声に、

「ええ、もう」

子供たちも、ふまんそうな顔をしました。

「今日は、たくさんのお話を教えてもらって楽しかったわね。みんなで、おれいを言いましょうね」

「はい」

「せーの。今日は、どうもありがとう」

大きな声であいさつする子供たち一人一人の顔を、カン太はゆっくりと見まわします。

そして、カン太も何か言おうと、口をひらきましたが、おねがちくちくして言葉がなか

なか出てきません。

「・・・・・・・・」

だまったまま、ズボンの前と後ろのポケットから、たくさんのだんぐりをとり出すと、カン太は、近くの男の子たちに手わたしました。

それから、息をすうとすって、

「早く今日にならないかなって思いながら、毎日一個ずつだんぐりをあつめたんだ。山のおみやげに、もって帰ってください」

わざと大きな声で言いました。

「わあ。だんぐりだ」

子供たちがだんぐりをわけのにおちゆうになっている間、カン太は木村先生にそつと近づくと、

「これは、先生の」

そう言って、大きなだんぐりを木村先生にわたそうとしました。

「このだんぐりは、カン太君のお友達になるはずだったんじゃない？？」
ダメダメと、木村先生が両手を横にふります。

カン太はニコっとすると、

「またここで会おうって、先生とやくそくした時、どんぐりの友達はいらないって思ったんだ。だから、これは先生に」

カン太は、てれくさそうに言います。

木村先生は、一つこくんとうなずくと、

「ありがとう。大切にするね」

どんぐりを、そっとうけとりました。

けれど、

「じゃ、さようなら」

と、くるりと後ろを向いた、カン太のさびしそうな丸いせなかを見た時に、

「やっぱり、もらえない」

と、木村先生が大きな声で言いました。

おどろいたカン太が、ふりかえります。

「このどんぐりは、この山の中のカン太君が好きな場所にうめてくれるかな。どんぐりから芽が出るころ、また見に来るから」

木村先生きむらせんせいが、えがおで言いいます。

「えっ。また山やまに来てくれるの」

「ええ、もちろん」

木村先生きむらせんせいがこくんとうなずくのを見みた後あとで、

「じゃあ、ここが、僕ぼくの大好きだいすな場所ばしよ」

そう言いって、カン太たは大きな切りかぶの横よこにしゃがみこみ、手てで土つちをほりはじめました。

木村先生きむらせんせいも、カン太たのとなりにしやがむと、

「春はるになるのが楽たのしみね。早はやくどんぐりの芽めを見みに来きたいな」

そう言いって、うふふとほほえみました。

その様子ようすを見みていた男おとこの子こが、

「先生せんせいだけずるい。僕ぼくもまたここに来きたい」

と言いうと、

「私わたしも、またカン太た君くんに会あいに来きたい」

と、女おんなの子こも言いいました。

カン太たはうれしくなっ



「どんぐりで友達ができるって、本当なんだね。きつねのおばあちゃんの言う通りだ」
こう、そっとつぶやきました。

ちいちゃんどピンクのHプロン

鈴木 美雪

さくらようちえんの、花ぐみのへやで、ちいちゃんは、ギュツと手をにぎりしめていました。

けい子先生が、これからおゆうぎ会のダンスのグループわけを、発表するのです。

女の子は「フランス人形」と「おそうじパタパタ」のダンスです。

ちいちゃんは、どうしてもフランス人形のグループになりたいと、思っていました。

「ちいちゃんは、おそうじパタパタよ。がんばってね」

ちいちゃんは、がっかり。にぎっていた手から、ちからがぬけていきます。なんだか、なみだまで出てきそうです。

「ちいちゃんと、わかれちゃったね」

となりですわっている、仲よしのまいちゃんが言いました。



「え、まいちゃんは、フランス人形なの？」

「やだあ、ちいちゃんの次によばれたのに。きいてなかったの？」

きつと、しよんぼりしていた、ちいちゃんの耳には、何もきこえてこなかったのでしょう。

「いいな、まいちゃんはフランス人形で……」

ちいちゃんは、だれにもきこえないくらいちいの小さな声こえで言いました。

おうちの人に作つくってもらいましょうと、けい子こ先生せんせいが絵えにかいて見みせてくれた、フランス人形にんぎょうのいしようは、ふわふわしたスカートに、白しろいタイツ。まるで絵本えほんの中なかのおひめさまです。

でも、おそうじパタパタのいしようは、ただのエプロンと三角さんかくきん。ちっともかわいくありません。

「かわいい、いしようがよかったのに……」

ちいちゃんは、ためいきをつきました。

次の日つぎから、ダンスのれんしゆうが、はじまりました。

『さあさあ おそうじはじめましょう』

ほうきをもって スリッパならし

げんきに テキパキやりましょう

それ。パタ。パタ。はい。パタ。パタ。パタ。』

はい。リズムで、とんだりはねたりする、ダンスです。

でもちいちゃんは、ぜんぜんやる気が出ません。どうしたって、さっき見たフランス人形のダンスのほうが、かわいく見えるからです。

つまらなそうに、ノロノロおどるちいちゃんに、

「もっと元気よく、がんばって」

と、けい子先生が声をかけます。

ちいちゃんは、小さくうなずきましたが、やっぱりノロノロとおどるのでした。

何日かして、みんなのいしように、できあがりました。

「じゃあ、今日から、いしようにきて、れんしゅうしましょうね」

けい子先生が言いました。

ちいちゃんは、フランス人形のダンスを、目を丸くして見つめました。

『かわいい かわいい フランス人形』

大きいおめめに 赤いほほ

レースのぼうしに リボンつけ

スカートふわりと おどります』

「すてき……」

くるくる回ると、スカートがふくらんで、おしろのぶとう会みたいで

まいちゃんが、列のまん中で、たのしそうにおどっています。

なんて、かわいいのでしょう。

ちいちゃんは、うらやましくて、しかたありません。

「ちいちゃん、まい、どうだった？」

となりにもどってきたまいちゃんが、ききました。

ちいちゃんは、

「うん」

とだけ、へんじをしました。

「もしかして、見てなかったの。ちいちゃん、次はちゃんと見てよ」

「へへ、ごめん」

ちいちゃんは、ちゃんと見ていました。はじめから、おわりまで。

でもなぜか、かわいくて、すてきだったよと、言いたくなかったのです。

もやもやした気もちのまま、ちいちゃんたちのばんになりました。

ちいちゃんのいしうは、お母さんがミシンでぬってくれた、ピンクのエプロンと、ピンクの三角きんです。

音楽がはじまりました。でもちいちゃんは、すこしもおどりません。くちをへの字にむすんで、前をじっと見つめて、立っているだけです。

「あら、ちいちゃん、忘れちゃった？ おぼえてるところだけでも、いいのよ」

けい子先生が、やさしく言ってくれました。でも、とうとう、おどらないまま音楽がおわってしまいました。

まいちゃんが、しんぱいそうに、

「ちいちゃん、どうしたの。おなか、いたいの？」

と、ききましたが、へんじをしません。どうしてか、今はまいちゃんのことを、あまり好きじゃないと思っていたのです。

（ちい、どうしちやったの。まいちゃんはいちばんの仲よしなのに。ダンスだって、ぜん

ぶおぼえてるのに)

自分が、わるい子になったような気もちです。でもちいちゃんは、フランス人形のダンスといしよのことしか、考えられないのでした。

うちにかえると、

「ねえ、ちいちゃん。今日ぜんぜんおどらなかつたってきいたけど、どうしたの？」
と、お母さんにきかれました。

ちいちゃんは、まだくちをへの字にしたまま、だまっています。

「ダンスがむずかしいの？」

すると、ちいちゃんはとつぜん、うわっと泣きだしました。

「だって、ちいはフランス人形がよかつたんだもん。まいちゃんみたいに、おひめさまになリたかつたのに。ドレスがよかつたのに」

お母さんのひざに顔をうずめて、ひっく、ひっくと泣きました。

「それにね、まいちゃんのこと好きなのに、フランス人形のダンスを見ると、好きじゃなくなつちゃうの。わるい子になつちやつたの」

「そうだったの」

お母^{かあ}さんは、ちいちゃん^{ちいちゃん}の頭^{あたま}を、やさしくなでました。

「それはね、まいちゃんがうらやましいっていう気^きもちが、すごく大き^{おお}くなったんじゃないかな。まいちゃんのことを、好き^すじゃなくなったわけじゃないのよ」

ちいちゃんは、顔^{かお}をあげました。

「そうなの？」

「そうよ。ちいちゃんが、わるい子^こになったのでもないの。だれにでもある気^きもちなのよ」

「お母^{かあ}さんにも、あるの？」

「もちろんよ」

ちいちゃんは、すこしホツとしました。

「それからね、お母^{かあ}さんが作^{つく}ったエプロン、よく見^みてみて」

「え」

ちいちゃんは、立^たちあがって、ようちえんかばんから、エプロンをとってきました。ハートのポケットと、お花^{はな}のアップリケのピンクのエプロン。

「ほら、お母^{かあ}さんのエプロンも見^みて」

「あっ」

お母^{かあ}さんがつけているのも、ハートのポケットと、お花^{はな}のアップリケのピンクのエプロン。

「おそろいだ」

「そうよ。ちいちゃんのエプロンを作^{つく}ってたら、かわいくて、お母^{かあ}さんもほしくなったの。どう、お母^{かあ}さん、にあう？」

「うん、にあうよ。かわいい」

「あらあ。ちいちゃんのほうが、かわいいわよ」

ふたりは見^みつめあって、うふふ、あははと笑^{わら}いました。

お母^{かあ}さんは、あたたかい手^てで、ちいちゃんの手^てをつつみました。

「お母^{かあ}さんね、ちいちゃんが、今^{いま}ごろおそろいのエプロンで、ダンスのれんしゅうしてるのねって思^{おも}うと、すごく元^{げん}気^きが出る^での。そうじもせんたくも、パツパツとやれるんだから」

「ほんとう？　ちいのこと考^{かん}えてるの？」

「そうよ。いつでも考^{かん}えてるのよ。だって、お母^{かあ}さんにとっては、ちいちゃんがいちばんかわいい、おひめさまだもの。フランス人^{にん}形^{ぎょう}にまけないくらい」

ちいちゃんはうれしくて、お母^{かあ}さんにギュウとだきつきました。

「ねえ、ちいちゃんもダンスをしながら、お母さんのこと思い出してみて。元気が出るかもしれないから」

「うん、思い出す」

ちいちゃんは、明るくこたえました。

次の日。フランス人形のダンスがおわると、まいちゃんに、

「かわいくて、すてきだったよ」

と、こんどはちゃんと言えました。

まいちゃんは、うれしそうに笑いました。

「ちいちゃんも、がんばってね」

「うんっ」

ちいちゃんは、いきおいよく立ちあがりました。

みんなで一列になると、音楽がはじまりました。

『さあさあ おそうじはじめましょう』

(きっとお母さん、おそろいのエプロンつけて、ちいのこと考えてる)

『ほうきをもって スリッパならし』

ちいちゃんは、強く足をふみならします。

『げんきに テキパキやりましょう』

右、左とうでをあげ、ジャンプします。

この歌、こんなに楽しい歌だったんだ。ダンスも、なかなかいいじゃない。フランス人形は、ゆっくり、ふわりふわりとおどるけれど、このダンスは、す早く体を動かして、キビキビしてて、かっこいいよ。

ちいちゃんは、はじめてそう思いました。そうしたら、なんだかうれしくなって、だれよりも元氣におどれました。

「ちいちゃん、すごくじょうずよ」

けい子先生が、ほめてくれました。

「うん、ちいちゃん、すてき。かっこいいよ」

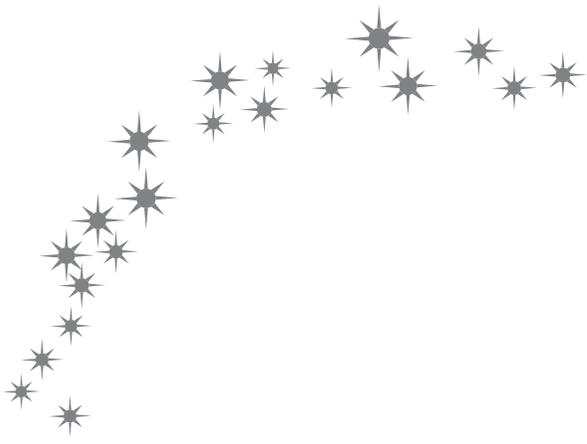
まいちゃんも、大きな声で言ってくれました。

今でもまだ、フランス人形のいしように、うらやましいと思っっています。

(でもちいはいは、お母さんが作ってくれた、ピンクのエプロンが好き)

ちいちゃんは、だいじそうに、ハートのポケットと、お花のアプリケをなめました。

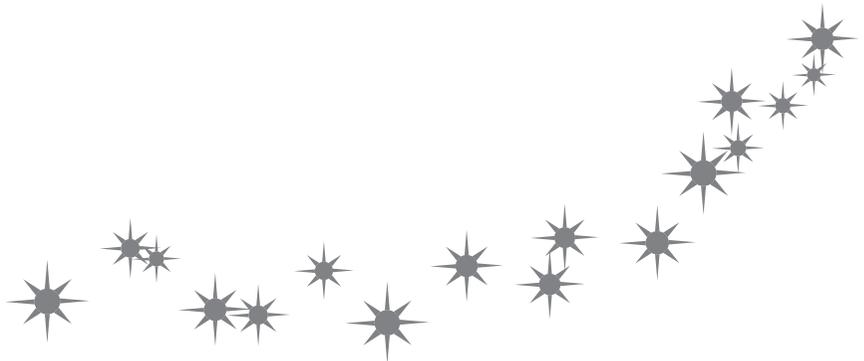
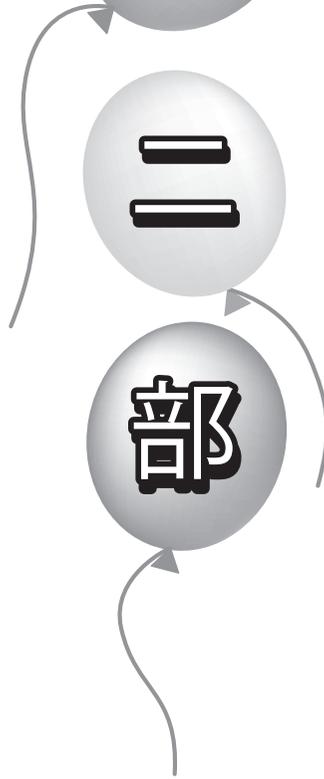




第

二

部



魚屋になりたかった猫

村上
ときみ

「シツ、シツ。あっち行ってろ」

今日は、バケツの水をバシヤバシヤツとかけられて、追いはられた。

「ニヤ。ニヤアーオ（ふん。見るくらい、いいじゃないか）」

オレはさつと身をひるがえし、商店街の真ん中にある小さな魚屋からはなれた。

（オレ様がいくらノラ猫だからって、魚をぬすむとはかぎらないぞ。ただ見ていただけじゃないか。山田さんの白猫のミイが、上目づかいて魚をうっとりとして見えても、何も言わないくせに）

体を一度ふるんとふるわせ、水をはじき飛ばすと、茶色と白のしまのしっぽをピンと立て、オレはさつそうと歩き始める。

目指すのは、いつもの神社。

それは、商店街のはずれにぼつんとある、小さな神社だ。

まわりに高い建物がないから、一日中お日様の光がふりそそぐ、お気に入りのお場所だった。

その境内で昼寝をすることが、オレの一番の楽しみだ。

「それにしてもあのサンマ、ぼつたり太っていて、うまそうだったな。魚屋になれば、毎日あんなうまい魚ばかり、食えるんだろうな」

「うまいながら、色あせた古い木のおさいせん箱の横に、背中を丸めてごろんと寝ころんだ。」

「ああ、魚屋になりてえ。うまい魚が腹いっぱい食えるなら、一度魚屋になってみたいもんだ」

オレは、ちらりと神社のお社の方を見てから、目を閉じた。

「ああ、魚屋になりてえ・・・」

「トラ吉。いつまでさぼってるんだ」

がつんとおしりをけられて、オレは目がさめた。

「イタタタタ」

いたおおしりをなめようとして、オレは首をひねった。

「おや？」

けれど、いつもと様子がちがう。

カラカラ空回りする頭で考えた後で、オレは突然さげんだ。

「しっぽがない！」

オレのじまんの、茶と白の長いしっぽがないのだ。

「なに、寝ぼけたことを言ってるんだ」

今度は、ばかりと頭をたたかれた。

「いてっ」

とっさに頭に両手をやって、またびっくりした。

「どんな小さな音だって、ねずみがじゃがいもにかじりつく音だって聞きのがさない、大切な三角の耳がない！」

オレはすっかりおどろいて、目をパチッと大きく開けた。

（なんだか手もおかしな感じがするぞ・・・）

オレは、頭にのせていた手の平を、おそろおそろ目の前にもってきた。
そして、

「うわあつ」

低くさげび、そんなはずはないと首を横にふりながら、

「人間の手だ・・・」

と、つぶやいていた。

オレは、ぎゅっと目を一回つぶり、それからもう一度自分の手を見してみる。

けれど、やっぱり人間の手だ。

「どうなってるんだ。人間になっちゃったのか」

オレは、手の平をにぎったり開いたりしながら、ため息まじりにこう言った。

「まさか、そんなわけが・・・」

間違いであってほしいと思しながら、オレは、あわてて、胸、おなか、足と自分の体を見渡した。

だけど、何度見ても、どこからどう見ても、それは人間の体だった。

「さっきから、ぶつぶつ言っ、なにやってんだ。いつまでも寝てないで、さっさと仕事を



しろ。じきに夕方だ。お客さんがたくさん来て、忙しくなるぞ」

そう言われて、声がする方を見上げると、そこにはなんとあの魚屋の主人が立っていた。

オレは口をポカンと開けて、主人の顔を長い間じっと見つめていた。

「さ、店に戻れ」

主人はあきれたというような顔を見ると、

「早く来ないと、クビにするぞ」

くるりと向きを変えて、早足で歩いて行ってしまった。

「どうやら、本当に魚屋になっちまったようだ。いやいや、オレはもともとから魚屋で、ここ

でノラ猫になった夢を見ていただけなのかもしれない・・・」

オレは、何が何だかわからなくなっていた。

けれど、よいしょと二本足で立ち上がると、フラツと体がふらついて、うまく歩けな

いことだけはよくわかった。

ふらつく足で、オレは主人を一生懸命追いかけた。

それから、オレは魚屋のトラ吉として働いた。

夕方になると、おおぜいのお客さんが来て、店は大忙しだ。

なれないオレはドタドタ動きまわる度に、何度も転びそうになって、主人にどなられた。

「おいおい、トラ吉。気いつける。大切な魚に傷がつくだろ」

そうして、やっと店を閉めるころになると、あんなにあった魚は、全部売り切れていた。

「さあて、ばん飯にするか」

主人の声で台所のテーブルに向かうけれど、テーブルの上ののっていたのは、うまそうだったマグロでもサバでもサケでもなかった。

「・・・」

ほうれん草のおひたしに豆腐と目玉焼き、大根おろしにしらすをのせた小鉢。

オレは、テーブルの上のおかずを何度も見た後で、がっくりと肩を落とした。

「商売繁盛。ありがたいことに、今日は全部売り切れたな」

主人はうれしそうにこう言ってから、ワカメの味噌汁をおいしそうにずっと飲んだ。

(こんなことなら、店がこむ前につまみ食いしときや良かったな)

オレは、がっくりした。

次の日のこと。

つかれはててぐっすり寝ていたのに、朝四時に起こされて、魚市場というところへ連れて行かれた。

朝早いというのに、ものすごい数の人がいせいよく働いている。

そして、一番オレをおどろかせたのは、ぎっしり並べられた魚の数だった。

「こんなに、たくさん魚、生まれて初めて見た。こんな風に魚にかこまれて暮らせたら、幸せだろうな」

オレはキョロキョロしながら、主人の後をついてまわった。

「やあ、ご主人。今日はいいサバが入ってますよ」

「大きなタイがあるよ。どうですか？」

魚市場の人が、次々に声をかけてくる。

主人はキロリと目を光らせ、鼻をひくひくさせながら魚を見て歩いている。

「今日の魚は、まずまずってとこだな」

主人があごに手をあてながら、小さく言った。

（魚だったら、何でもいいわけじゃないんだ。うちの店の魚がおいしいと評判なのは、こ

の主人の魚を見る目がきびしいからなんだな)

オレは、ふむふむと大きくうなずいた。

魚市場での仕入れが終わり、店に戻ると、主人は器用に魚をさばき始める。

オレには、店のそうじが待っていた。

それから、その日も休む間もなく働き続けたんだ。

こうして、何日も何日も過ぎていった。

店の二階には、安心して寝られるあたたかな寢床がちゃんとあるし、顔なじみになった

お客さんから、

「トラ吉ちゃん、よく働くね。えらいねえ」

なんて言われると、とてもうれしかった。

魚屋も悪くないなと思っただけれど、朝早くから夜まで、昼寝もしないで毎日働き続ける

のはとてもつかれた。

何よりも、うまそうな魚は見るばかりで、あまり口に入らないことが、オレをよけいつ
かれさせていた。

そんなある日の午後、ちょうど店がこみ始めた頃だった。

「はい、あじの開き四枚だね」

二本足でもふらつかないようになっていたオレが、お客さんの注文にこたえようとした時だ。

「おっ、と」

ふとしたひょうしに、ぬれた床にすべってよろけ、店先に並べてあった魚の上はずしんとたおれこんでしまった。

「ばかやろう!」

主人は、すぐにオレの腕をぐっとつかんでおこすと、ものすごい顔でおこった。

びっくりしたお客さんたちが、一歩、二歩と店から遠ざかって行く。

「魚に、なんてことするんだ」

それから、振り払うようにしてオレの腕をはなすと、オレがちらかしてしまった魚を一匹、一匹手にとってはながめた。

そして、さびしそうに、

「全部台無しだ・・・」

と、つぶやいた。

「トラ吉ちゃんも、わざとやったんじゃないからさ。許してあげなよ」

おなじみのお客さんが、オレをかばってくれる。

「下に落ちたわけじゃないし。私は、そのカレイで大丈夫よ」

明るい声で、他のお客さんが魚を買おうとしてくれても、

「すいませんね。もう売れるような魚はありません。今日は、店じまいです」

主人は、お客さんたちに向かって頭を深く一度下げた。

そして、それきり口を閉ざして、ゴトゴトと店を片付け始めてしまった。

あきらめたお客さんたちが、店からはなれていくなか、

「すいませんでした・・・」

オレは、ふるえる声で言い、主人に向かって頭を深く下げ続けた。

「めいわくをかけました・・・」

オレが何か言っても、主人がこちらを向こうとする気配はなく、せっせと片付けをして
いるだけだった。

「・・・」

しめつけられるようにキリキリと、オレの胸がいたみ始める。

「すいませんでした」

もう一度大きな声で言った後、いたむ胸にたえきれなくなつて、オレは店を飛び出した。魚屋の暮らしは思ったより大変で、たしかにいやになっていた。

けれど、それよりも魚をだめにしてしまったことの方がつらかった。

朝早く起きて、お客さんのために主人が目を光らせて仕入れる、大切な魚。

おいしかったわよと、お客さんがほめてくれる、新鮮な魚。

どうしていいのかわからなくなったオレは、夢中で走り、気が付くとあの神社まで来ていた。

忙しくて、ずっと来られなかった神社だ。

さいせん箱の横に、頭をかかえてうずくまり、

「ああ、なんてことしちまったんだ」

しぼり出すようにこう言うと、ホロリと涙が流れた。

つかれていたオレは、いつの間にかねむっていたようだった。

しばらくして目を開けると、真っ赤な夕焼けが空をおおっていた。

「ふわあ」

と、オレは、一度大きくのびをした。

すると、オレの目に映ったのは猫の前足だった。

くるつとふりかえると、じまんのしっぽがヒクヒクと動いているのが見えた。

「ニャアーン。ニャゴニャゴ、ニャア（なーんだ。今までののは、夢だったのか）」

オレは、ほっとした。

「ニャ、ニャオーン（やっぱり、猫のくらしが一番だ）」

鳴き声も、猫そのものだ。

（それにしても、ずいぶん長い夢だったな）

そう思った時、目の前に銀色にかがやくサンマがストン、ストンと二匹落ちてきた。

オレがびっくりして、大きく飛びはねると、

「ククツ」

と、頭の上の方から笑い声が出た。

「オレも今日は久しぶりにうまい魚をたっぷり食うことにするよ。おまえのおかげだ。あ



りがとな」

見上げると、おさいせん箱の横で、魚屋の主人がにやっと笑っていた。

「そのサンマは、店を手伝ってくれたお礼だ。けどな、もう二度とこっちの世界に来るんじゃないぞ。魚屋も大変な商売だったこと、よくわかっただろ」

それだけをぼつりと言い残して、主人は帰って行った。

(ということは、やっぱりあれは夢じゃなかったのか)

オレはこう思ってから、

「ニヤア、ミヤアオ。(ああ、よくわかったよ)

ニヤアゴ、ニヤオニヤオン(魚屋の仕事、がんばってくれよな)」

夕ぐれの中、主人の背中に向かって声をかけた。

すると、境内から出て行こうとした主人がぐるりとこちらを向き、

「ああ、がんばるよ」

と、言ってから、

「オレも、ここで昼寝をするのが大好きだったな」

こうつぶやいて、フツと笑った。

「じゃあな。トラ吉」

主人は、右手をあげてオレに合図し、鳥居をくぐって出て行く。

主人の姿が見えなくなると、オレはがぶりとサンマにかぶりついた。

そして、

(そう言えば、あの店の主人の名前は、『ミケ男』とかいう変てこな名前だったよな……)
ふと主人の名前を思い出した時、オレのヒゲが、ピクリとふるえた。

空そらからのエール

わしお ちえ

一 アメはひっぱりだこ

四年一組よねんいちくみが始はじまって、一カ月いっかげつが過すぎた。

「アメ、おっはよーっ！ 今度こんどの土曜日どようびあいてる？」

月曜日げつようびの朝あさ、雨音あまねが教室きょうしつに入はいるなり、レナが猛スピードもうスピードで、かけよってきた。

『雨音あまね』は、名前なまえに『雨あめ』と言う字じがついているから、みんなから「アメ」と呼よばれている。

「あつ、レナちゃん、おはよう」

雨音あまねは、レナの勢いきおいにちよつとびっくりしながら、ゆっくりと返事へんじをする。

「ねっ、アメ、だから、土曜日どようびあいてる？」

レナは、たたみかけるように、雨音に聞く。

「あつ、……ああ。土曜日は、今のところ予定はないけど」

雨音が、おどおど答える。

「良かった。じゃあ、さくら公園でバーベキューするから、アメも一緒に来てよ」

「えっ？ あ、ああ うん」

「じゃあ、朝十時にアメンちまで、パパの車でおかえに行くね」

レナは、それだけを言うと、バタバタと忙しそうに走って教室から出て行った。

雨音は、ホツといきをはいて、しよっていたピンクのランドセルをつくえの上におろした。レナと話すときは、ちよっときんちようしてしまう。

レナの家は、家族みんなでよくお出かけをするみたい。雨音は、ちよっとだけいいなあと思う。雨音の家は。パパと雨音の二人だけだから。ママは、雨音が幼稚園の年長さんのとき、病気でお空に行ってしまったのだ。

「アメ、聞いて、聞いて。私、今度の土曜日、サッカーの試合に出ることになったんだ。見に来てくれる？」

次にやって来たのは、ケイ。ケイは、保育園でゼロさいじクラスの時からずっと一緒。

雨音が安心できる、たった一人の友達だ。雨音がこまっているときは、いつもそっと助けてくれる。

「あっ、ごめん。さっきレナちゃんとバーベキューの約束をしちゃった」
「ええ、そうなのお」

「ケイちゃん、ごめん」

残念がるケイを見て、雨音は『ごめんね』の気持ちでいっぱいになる。

「私の初めての試合、アメにも見てほしかったな」

ケイは笑いながら、ちよつと口をとがらせる。

「ケイちゃん、本当にごめんね。でも、ケイちゃん、もう試合に出してもらえるなんてすごいね」

ケイは、雨音と違って友達もたくさんいる。背が高く運動しんけいもバツグンにいい。四年生からサッカー教室に通い始めたところなのに、もう試合に出してもらえようになっただけ。サッカーが上手な女の子って、なんかカッコいい。雨音は、そんなケイと友達でいることが、ちよつとうれしい。

「アメ、今度の日曜日あいてる？」

今度は、クラスの人気者のシヨウタからのお誘いだ。

「あつ、ごめんなさい。日曜日はおばあちゃんたちが来る日なの」

「えー、そうか、残念。みんなでつりに行くから、アメが来てくれたらいいなと思ったんだけど。……まっ、日曜日の天気は、アメがいなくても大丈夫かな」

このごろ、休日の雨音はひっぱりだこだ。それは、雨音がいるとなぜだか雨が降らないからだ。今まで、遠足、運動会など大事な行事に雨が降ったことは一度もない。

今年の水泳大会なんて、直前までザーザー降りだったのに、雨音たちの学年の順番が近づくと急に雨が上がり、三年生だけが水泳大会を決行できたのだ。

夏祭りの時もそうだった。神社は大雨になっておみこしは中止になったけど、雨音たちが行った花火大会は、何とか最後まで雨に降られずにすんだ。

三年生の夏ごろから、「アメがいると雨が降らない」とみんなが、当たり前のように思うようになっていた。

二 パパとママ

「パパ、ただいまー」

「おかえり」

パパは、家で仕事をしている。でも雨音が帰ると、いつだって必ず仕事の手をとめて、雨音をむかえてくれる。

「パパ、今日、レナちゃんに土曜日バーベキューにさそわれちゃった。さくら公園でするんだって。行ってもいいよね？」

「バーベキューか、いいなあ。楽しんでおいで」

「そしたらね。その後ケイちゃんにも、サッカーの試合見に来てったのまれちゃった。シヨウタ君には日曜日さそわれたし」

「そうか、雨音は、人気者だねえ」

パパにそう言われて、雨音は得意顔になる。雨音のうれしそうな顔を見て、パパも笑顔になる。

雨音は、ケイのほかには親しい友達はいない。だからこうしてみんなからさそわれるのは、ちよつといい気分だ。

「雨音」という名前は、ママがつけてくれた。友達から「アメ」と呼ばれるのはちよつと

変な気もするけど、イヤじゃない。雨音は、「アマネ」という名前が、けっこう気に入っている。

みんなは、雨に降られるのがイヤだから、雨音をさそってくるけれど、実は雨音は、雨の日もきらいじゃない。まどから降る雨をながめて、雨の音を聞いていると、少しホツとする。雨にぬれて光っている緑の葉っぱを見ると、何だか元気がわいてくる。

「ママ、ただいま」

雨音はリビングのママの写真に向かって、もう一度今日の出来事を、急いで話し始める。ママの写真の横には、スミレの花が今年もきれいに咲いている。ママはお花が大好きだった。ママが育てていたお花は、ベランダにも部屋の中にもあふれている。パパが一生懸命お世話をしているからだ。

雨音は、ママがいつも弾いていたピアノの前にすわって、耳をすまます。こうしていると、自分のピアノに合わせて歌うやさしいママの声が、聞こえてくる。ママは、いまも、いつだって雨音のすぐそばにいてくれるんだ。

だから、さびしくないよ、ママ。雨音は大丈夫。

雨音に最初にピアノを教えたのは、ママだった。ママと一緒に弾いたピアノの曲

や歌は録音してある。だから雨音はいつでもママのピアノや、歌声を聞くことができる。

三 林間学習

「いよいよ明日から林間学習です」

終わりの会で、先生の話が始まった。初めての宿泊学習だから、みんなのテンションは最高潮。ロ々にしゃべっていて、いつまでたってもザワザワがおさまらない。

「はい、みなさん、静かに。……明日に備えて今日は早く寝ましょう。それからお弁当とか雨具とか、大事なものを忘れないようにね」

先生は、声を張り上げて話を続ける。

先生、このクラスにはアメがいるから、雨具なんか、いりません」

先生の言葉にレナがつっこむと、みんなもロ々に「そうだ」「そうだよね」と言い始め、また騒がしさが増していく。

「そうね。でも山の天気は変わりやすいから、ねんのために雨具は用意しておいてよ。必ずね！」

先生は雨音の方を見て、にっこり笑った。

五月三十日、林間学習当日は、天気予報通り朝から元気な太陽が顔を見せていた。野外活動センターに着くと、みんなハイキングや川遊びなど、思いつきり楽しんだ。ところが夕食のカレーづくりを始める頃になって、急に空が暗くなってきた。

「えっ？ まさか、雨？」

雨音は心配そうに空を見上げる。差し出した左のてのひらに、雨つぶがポツンと落ちた。

(どうしよう。私、どうしよう)

雨音の胸は、きゆうくと苦しくなってきた。

「ええーっ！ これって、まさかの雨？」

みんなが、口々に騒ぎ始める。

「大丈夫だよ、アメがいるんだからすぐにやむよ」

「そうだよね」

みんなは、すぐにやむと信じてカレー作りを続ける。しかし、雨はしだいに強くなっていく。



「みなさん、雨のかからないところに移動しましょう」

先生の指示で、みんなは大急ぎで食器やなべを、屋根のあるところに運んだ。

雨はどんどん激しくなっていく。レインコートを持っていなかった子たちも何人かいて、その子たちはずぶぬれになってしまった。

屋根のあるワンパク広場で、何とかカレーを食べることはできたものの、楽しみにしていたキャンプファイヤーは、中止となってしまった。みんなのテンションは急降下。おいしいカレーライスの味も、どこかに吹っ飛んでしまった。

びしょぬれになった子たちの中には、雨音にもんくを言う子まで出始めた。

「アメ、どうなっているの？ 何とかしてよ」

「私、ずぶぬれになっちゃったよ。アメ、もう、どうしてくれるの」

「ごめんなさい」

雨音は、うつむいたまま小さな声でみんなにあやまる。

「雨が降ったのは、アメのせいじゃないよ。アメはあやまらなくていいよ」

「ケイちゃん、ありがとう。……でも、ごめんなさい」

ケイはそう言ってくれたけど、みんなはそう思っていないみたい。雨音は、その場から

消えてしまいたい気持ちになった。

その日以来、社会見学も夏祭りも水泳大会も、雨音たちの行事はことごとく雨がふるようになった。

「アメがいると、必ず雨が降るよね」

「だって『雨』って名前だもんね」

今まであんなにアメをさそっていたのに、休日に雨音をさそう子は、だれ一人いなかった。

十月三日の運動会まで、あと数日となったある日。

「運動会、絶対に晴れてほしいよね」

「でも、アメがいたらダメかも」

「アメ、運動会に来なかったらいいのね」

「しいい！ 聞こえちゃうよ」

授業が終わって雨音が教室を出たとき、ろう下のすみから、レナたちのひそひそ声が聞こえてきた。

雨音は、急に背中がひやりと冷たくなって、胸がきゆうつと苦しくなった。聞こえないふりをして、必死でその場を立ち去ったものの、胸のヒリヒリは、どんどんふくらんでいく。雨音は、両手のこぶしをぎゅつとにぎり、くちびるをかみしめて家まで走って帰った。

四 十歳の誕生日

「ただいま」も言わずに家に入った雨音は、そのままリビングのママの写真の前にすわりこんだ。

「ママ、どうして雨音なんて名前をつけたの。雨音なんて名前、もう大きい。ママはどうして、雨音のそばにいてくれないの。雨音の話を聞いてくれないんだよう……」

大つぶのなみだが、次から次へと流れ落ちる。雨音は、今までこらえていたものを全部放り出すように、大声で泣き続けた。ママが空に旅立ってから、雨音がママの前でこんなに泣くのは初めてだった。

パパは、雨音が大ききをしているのを、だまって見守っていた。しばらくしてパパは、ゴールドのリボンのかけられた赤いふくろを雨音に差し出した。

「ちょっと早いけど、ママからの誕生日プレゼントだよ」

「えっ？ ママから？」

「そう、ママが雨音の十さいの誕生日のために用意してくれていたんだよ」
赤いふくろを開けてみると、中から誕生日カードがでてきた。

にせんにじゅうごねん じゅうがつついたち
二〇二五年 十月一日

雨音、十さいの誕生日、おめでとう！

カードの中には、小さな赤ちゃんをだいたママがいた。真っ赤な顔をした、しわしわの赤ちゃんをだいたママは、うれしそうに笑っている。

「これ、私？」

「そうだよ、雨音が生まれた時の写真だよ」

たんじょう日カードには、SDカードがついていた。

「えっ？ パパ、これ、何？」

パパはにっこり笑いながら、テレビにそのカードを差し込んだ。

「雨音」

テレビ画面から、にっこり笑ったママが現れた。

それは、四年前にママが用意してくれていた、雨音への十歳の誕生日プレゼント、ビデオレターだった。

雨音とおそろいのかみかざりをつけた画面の中のママが、話し始める。

二〇二五年十月一日、

雨音、十歳の誕生日おめでとう。

もう大人の半分の年になりました。二分の一の成人です。きっとすてきなお姉ちゃんになっっているんだろうなあ。

今日は雨音が生まれた時のことを話します。

ママのお腹にいる頃、雨音はのんびり屋さんで、生まれる予定の日を過ぎても、なかなか出てきてくれませんでした。ママは心配で心配で、このまま赤ちゃんが、生まれなかつたらどうしようと思うと、なみだがとまりませんでした。

そのとき、しとしと雨が降り出し、やがてその雨はザーザー降りになりました。

ママはそのザーザー、パラパラパラという雨の音を聞いていると、不思議なことにだんだん心が落ちて着いてきたのです。

「赤ちゃんも、いま、一生懸命がんばっているんだ。大丈夫」と思えるようになってきました。

雨音が生まれるまで、三日間も雨が降り続きました。あなたが「おぎゃー」と泣いたときには、太陽が顔を出し、空には大きな虹がかかっていました。

雨の音に力をもらって生まれてきた赤ちゃん、名前を「雨音」と決めました。

雨が降っているときは、雨音のことを雨が応援してくれているときです。きっとその後、いいことが待っています。

これからも雨音のことを、空から雨とママが、ずっと応援していますよ。

「ママ、ステキな名前をありがとう」

雨音はなみだでぐしょぐしょの顔で、テレビの中のママに向かって言う。

ふくろの中には、もう一つプレゼントが入っていた。真っ赤なかさだった。ふちにだけ白いラインと雨だれもようのついた、ちよっと大人のお姉さんみたいなかさだった。

「うわあ、ママ、ステキ、ありがとう」

雨音は、真っ赤なかさを広げて、ママの前でくるくると回ってみせた。

「雨音、お姉さんみたいだな」

パパも、にっこりわらう。

その日は、夕方から雨になった。雨音はピアノの前にすわり目を閉じて、じっと耳をす
ます。雨の音の中に、ママのピアノと歌が聞こえる気がした。

五 運動会

十月三日、運動会が始まった。

天気予報は、くもりのち雨。途中で雨が降ったら、そこで運動会は中止になる。

うすぐもりの中、プログラムは次々に進んでいく。

四年生の最後のプログラムは、ソーラン節。今日まで一生懸命みんなが練習してきたやつだ。これだけは、家の人やみんなに見てほしい。何とかソーラン節まで、天気が持つて

ほしい。

手づくりのはっぴを着てハチマキをしめ、入場門に並ぶ。雨音は、心配そうに空を見上げる。空は、明らかにさつきより暗くなってきている。

ヤーレン・ソーラン・ソーラン……
始まった。

腰を落として力強く、かっこよくおどる。ラストまであと、少しだ。みんな、ファイナーレのために、中央に向けて走り出す。雨が、ポツポツ落ち始めるが、みんなは気にもとめず、必死で踊り続ける。

「ヤアーツ!!」

全員で作る最後のポーズ。

キマッタ!

拍手の嵐につつまれる。

みんな、全力疾走で退場。退場門に着いた瞬間に、ザザーツ!!、どしゃぶりの雨が落ちて来た。

みんな、びしょぬれになった。髪の毛から、雨水がしたたり落ちている。
「キヤハハハ……」



お互いのすがたを指さしながら、大笑い。

「チョー、気持ちいい！ 雨、サイコーじゃん！」

「アメ（雨音）、雨、サイコー！ ありがとう」

「アメ（雨音）、グッドタイミングの雨、サイコー！」

みんなが、雨音に向かって言う。

「私のせいじゃないよ。雨が降らなかったのも、降ったのも」

雨音は、小さな声だけど、はっきり言った。

「フフ、アメ、言ったね。その通りだよ」

ケイが、横から雨音の体を、ひじてツンツンしながら言う。

「だけど、今までアメのおかげで、わたしたちさんざん大変な……」

アメをせめようとするレナの言葉を、ケイがさえぎる。

「さんざん……って何だよ。私たち、ずっとアメといっしょにいたじゃん。林間も社会

見学も……。アメのせいなわけないじゃん。みんないっしょじゃん」

「まあ、そうだな」

「確かにそうよね」

「雨が降るのは、イヤだけどな」

他の子たちも、ずぶぬれのまま、口々に言い始める。

「でも、私は、雨も大好き。雨の音もおいも」

雨音は、今度はしっかりとした声で、はっきりと言った。

「おれも、案外好きかも。だって、これ。気持ちいいぜ」

シヨウタも、びしょぬれのハチマキをふりながら言う。

シヨウタのまねをして、みんなも大笑いしながら、ぬれたハチマキをふり始める。

「あれっ？ もう、やんだ？」

「あっ、ほんとだ」

ハチマキをふっていた子たちが、口々に言う。

「みなさん、雨がやんだので、プログラムを再開します」

放送が流れる。

雨音は、目をつぶって思いつきり雨の空気をすいこむ。そして空を見上げて、にっこり笑う。

(ママ、ありがとう)

光ひかりの窓まど ルチエツタ

山やま地ぢ
正ま人さと

丘おかの上うへに、一軒いっけんの古ふるびた洋館ようかんがありました。壁かべの塗ぬりはところどころはがれ落ち、庭にわは雑草ざっそうがのび放題ほうだいで、かつての華はなやかさは見る影かげもありません。

長ながいあいだ、主あるじのいなくなったその屋敷やしきは、ただ静しずかに時ときだけを刻きざみ続つづけていました。二階にかいの正面しょうめんには、アーチ型がたの大きおおな窓まどがひとつ。ガラスはうっすらとほこりをかぶり、木の枠わくには細ほそいひびがいくつも走はしっています。

重おもたげな雲くもを映うつしながら、その窓まどはじつとそこにたたずんでいました。

この窓まどには、「ルチエツタ」という名前なまえがありました。ある春はるの日ひ、この家いえに住すんでいた少女しょうじょが、窓辺まどべに立たってふとこぼした言葉ことばがきっかけてした。

「この窓まど、丸まるくてかわいい。それにおひさまの光ひかりがいっぱい入はいってくるわ」
その時とき、そばにいた父親ちちおやが微笑ほほえんで言いいました。

「そうか。だったら、この窓に名前をつけてあげよう。『ルチエッタ』。光を運ぶ窓って意味だよ」

それ以来、家族はこの窓を、親しみを込めて「ルチエッタ」と呼ぶようになりました。ルチエッタは、家族の笑い声や歌声、時には涙までも、ずっと見守ってきました。とくに少女が窓を開け、朝ごとにパンくずをまいて、鳩たちに声をかけるひとときが、ルチエッタはいちばん好きでした。

「さあ、お食べ。今日も元気でね。わたし、おひさまの光がいちばん好きよ、光の中になると、ワクワクして幸せになるの」

けれど、楽しい日々はそう長くは続きませんでした。突然、家族は町へ引っ越すことになったのです。家具や荷物が運び出され、庭で遊ぶ子どもたちの声もやがて聞こえなくなりました。家の中はしんと静まりかえりました。

お別れの日、少女はルチエッタに向かって小さく手を振りました。

「さようなら、ルチエッタ」

それが、ルチエツタが聞いた少女の最後の声でした。

それからというものの、季節はめぐり、屋敷はすっかり忘れられたように風雨にさらされ、朽ちていきました。

ルチエツタは、どんよりとした空をただじっと見つめながらつぶやきました。

「わたしは、もうただの古びた窓……。役目も終わったのね」

そんなある午後のことでした。一羽の伝書バトが、ルチエツタのひさしにひらりと舞い降りました。真っ白な羽は春のひざしを受けて、まるで雪のように輝いています。

風に乗って、空高くからすべり込むように降りてきたその鳥は、羽をふるわせながら、気持ちよさそうにあたりを見まわしました。

「こんにちは、窓さん。ぼくはアズーロ。ちよっとだけ、ここで休ませてね」

ルチエツタは驚きました。こんなに静かな場所に、誰かが訪れるなんて、本当に久しぶりのことだったからです。

「もちろんよ、アズーロ。わたしはルチエツタ。ようこそ、こんな寂しいところに来てくれるなんて、とても嬉しいわ」

アズーロは翼をゆっくりやすめながら、話しはじめました。

「ぼくはね、ずっと遠くの世界を旅してきたんだ。さまざまな花が咲く大草原や、雪に包まれた高い山々、青くきらめく大海原……。どこも美しく、忘れられない景色ばかりだよ」

ルチエッタは、アズーロの話に目を輝かせました。

「そんな美しい世界があるなんて……。わたしはずっとここで同じ景色しか見たことがないわ。動くこともできないし、新しい世界を知ることもしかないの」

アズーロはルチエッタの声に耳を澄ませながら、やさしく言いました。

「きみにも新しい世界を見るチャンスはあるよ。大切なことは、ほんの少しの勇気を持つことさ。ぼくはそう信じている」

ルチエッタはアズーロの言葉に胸がときめきました。

「少しの勇気……」

けれど、具体的にどうすればいいのかはルチエッタには分かりませんでした。

なぜなら、彼女は大きな窓枠にしっかりとはめ込まれていて、身動きひとつできなかつたからです。

翌日、空の色は朝から曇りがちで、風もいつもより強く吹いていました。昼すぎには空がかき曇り、激しい雨が降り始めました。ルチエッタは、灰色に染まった空をじっと見つめていました。木々はざわざわと音を立て、雲は低く垂れこめ、まるで何か良くないことが起こる前ぶれのようでした。

風はさらに強まり、葉っぱが庭のあちらこちらで舞い上がり、古びた洋館の壁にパタパタとぶつかり始めました。遠くの空では雷が鳴り、稲妻が一筋、山の向こうを照らししました。

「こんな嵐、久しくなかったわ」

ルチエッタは不安と少しの興奮を感じていました。アズーロの言った言葉が思い返され

「きみにも新しい世界を見るチャンスはある。ほんの少しの勇気を持てば……」

ルチエッタの中で、今まで感じたことのない熱いものが湧き上がってきました。

「わたしも……わたしも、新しい世界を見てみたい！ ずっとこのままじゃ嫌。もっと広い世界をこの目で見たいの！」

その時、突風が屋敷を揺らし、ルチエッタをガタガタと震わせました。屋根の一部がバリバリと強風にあおられ、音を立ててはがれていきました。雨は大粒のしずくとなってルチエッタをたたきつけました。

「今だわ……！」

ルチエッタは大きく深呼吸をすると、自分の体をぐっと揺らしました。するとガラスの体に小さなひびが入り、ミシミシと軋む音が響きました。

「えいっ！」

バリーン！

大きな音とともにルチエッタは自らの力で割れたのです。ルチエッタは、硬い窓枠から開放され、粉々の破片となって床へと散らばっていきました。ビュービューと嵐の風が屋敷の中を吹きぬけます。

「わたし、自由になった……」

ルチエッタは、床に散らばりながらも、これまで感じたことのない誇らしさと、不思議な解放感に満たされました。ただ、これからどうすればいいかは、まったくわかりませんでした。

嵐の夜がようやく過ぎ去り、夜明けの空はどこまでも澄みわたる青に変わっていました。

風も静まり、庭の木々は、何事もなかったかのように葉を朝日に輝かせていました。

屋敷やしきの中なかでは、昨夜さくやくだ砕け散ちったルチエッタのかけらが、床ゆかのあちらこちらに散ちらばって
いました。朝あさの光ひかりが差しこみ、小ちいさなガラスの破片はへんは、きらきらと宝石ほうせきのように輝かがやいてい
ます。

そこへ、静しずけさを破やぶるように、空そらの高たかみから白しろい影かげが降おりてきました。

「ルチエッタ！ きみ、無ぶ事じだったんだね！」

アズーロでした。アズーロは、壊こわれた窓まど枠わくにとまり、ガラスのかけらとなった、ルチエツ
タをしばらく見みつめました。

「これが、きみの新あたらしい姿すがたなんだね」

アズーロはそっとくちばしで、ルチエッタのかけらを拾ひろい上げました。

「さあ、ぼくがきみに新あたらしい世せ界かいを見みせてあげるよ！」

アズーロはルチエツタをしっかりとくわえ、力ちから強つよく翼つばさを広ひろげました。そして、空そら高たかく舞ま
い上がったのです。朝あさの光ひかりが二ふたりを包つつみ、風かぜがやさしく背せ中なかを推おしてくれ
ます。

「わたし、飛んでる……！」

ルチエツタは、空の冷たい空気を体いっぱい肌で感じ、太陽のぬくもりを浴びながら、自分が今、本当に自由なのだ実感しました。

思い出深い丘の上の洋館は、次第に小さく遠ざかっていきました。

空からの眺めは、これまで見たことのない景色が広がっていました。アズーロの言ったとおり、深い森の緑、きらきらと光る小川、色とりどりの花が咲き乱れる野原。空のずつと向こうには、青く広がる海が光っています。

「アズーロ、本当に世界はこんなにも美しいのね……！」

風の音、鳥たちのさえずり、森の木々のざわめき、ルチエツタにとっては、どれもが初めてのこと、その驚きと感動で胸がいっぱいになりました。

アズーロは、ルチエツタを連れて森の奥深くへと飛んでいきました。やがて、大きな木々に囲まれた、小さな湖が姿をあらわしました。



「ここが、ぼくのとおきおきの場所さ」

アズーロはふわりと羽ばたき、ルチエッタを湖面へとそっと近づけます。静かな水面が揺らぎ、小さなかけらになったルチエッタが、きらきらと輝きながら映しだされました。

「わたし……体は小さくなったけれど、心は以前より、もっと大きくなった気がするわ」
ルチエッタは、胸の奥がじんわりと温かくなるのを感じました。これまで知らなかった世界が、どんどん広がっていく。その喜びが、心をいっぱいにしてくれたのです。

「世界は、なんて美しいの！ アズーロ、あなたのおかげで、わたし、たくさんの景色に出会えたわ」

けれど、その喜びの奥からふいに別の想いがこみ上げてきました。

「でもね……アズーロ」

ルチエッタは、そっと声を落としました。

「わたし、やっぱり誰かのためにもう一度輝きたいの。ただのかけらで終わりがたくない。心に光を届ける、そんなわたしに戻りたい」

アズーロは、にっこり笑い力強く答えました。

「その願い、きっと叶うよ。さあ、まだまだ旅はこれからさ」

二人はまた空へと飛び立ちました。山を越え、海を越え、潮風の香り、木々のささやき、花の甘い匂い――。ルチエッタは全身で驚きと感動を感じながら。

アズーロが向かったのは、村はずれにぽつんと立つ小さな小屋でした。そこには、年老いたガラス職人が、ひとり静かに暮らしていました。

「このおじいさんなら、きみをもう一度輝かせてくれるよ」

実は、このガラス職人こそ、アズーロの飼い主だったのです。

アズーロがくちばしでルチエッタのかけらを差し出すと、おじいさんは、しわだらけの手でやさしく包みこみました。

「おお、アズーロ。やっと帰ってきたかと思ったら、おみやげを持ってきたのかい？ ……おやまあ、これはなんて美しいガラスだ」

おじいさんは、ルチエッタを空にかざし、目を細めました。

「これは……。もしかしたら、お前は、わしの夢を叶えてくれるかもしれん」
若い頃、諦めてしまった夢。それは「世界一美しいステンドグラスを作る事」でした。

その夢が、ルチエッタのかけらの輝きを目にした瞬間、もう一度動きはじめたのです。おじいさんは工房にこもり、何日も何日も、心を込めてルチエッタのかけらと鮮やかな色ガラスを組み合わせていきました。そして――

ルチエッタは、新しい命が吹き込まれ、美しいステンドグラスに生まれ変わったのです。赤や青、緑、黄色のガラスが織りなす色彩に混ざって、まるで絵画の一枚のように輝きを放っています。

ステンドグラスは、村の教会の一番高い丸窓に飾られました。

朝日が差しこむと、ルチエッタは色鮮やかな光を放ち、教会の壁や床を淡い虹色に染めていきました。まるで「おはよう」と笑いかけているように、やさしく、やわらかく。

「わたし、またみんなのために光を届けられているのね……。こんな幸せなこと、あるかしら」

ルチエッタの心は、感謝と喜びで満たされました。

そんなある日、この教会で結婚式が行われました。

花嫁がバージンロードを歩くその姿を見て、ルチエッタは驚きました。それは―かつて自分の前で無邪気に笑っていたあの少女だったのです。

少女は美しいドレスに身を包み、大人の女性となり、幸せそうに輝いていました。

ルチエッタは、胸の奥からあふれてくる光を、そっと彼女に注ぎました。

花嫁もふと足を止め、ルチエッタの光に包まれながら、どこか懐かしそうに微笑み、再び歩き出しました。

その時、アズーロが教会に舞い降りました。

「ほらね、君は新しい世界を自分で見つけたじゃないか」

ルチエッタは、静かに答えました。

「アズーロ、ありがとう。わたしに自由をくれて、もう一度輝かせてくれて」

アズーロは、にこりと笑い、

「じゃあ、またね。ぼくは次の旅に出るよ」

そう言うと、青い空へと舞い上がりました。



ルチエッタは、塔とうの周まわりをぐるぐると旋回せんかいしながら、うれしそうに舞まうアズーロの姿すがたを、いつまでも見み上あげていました。

こうしてルチエッタは、これからも人々ひとびとの心こころに光ひかりを届とどけ続つづける窓まどとなったのです。

テツオが答えました。良いごえんという意味はよくわかりませんが、シヨウは笑顔でうなずきました。悪い意味ではなさそうです。シヨウとテツオは一緒におさいせんを入れて、お社に向かって手を合わせました。

——寺田正一です。九歳になりました。今年からお祭りに参加できます。よろしくお願
いします。

心の中でつぶやいてから隣を見ると、テツオも顔を上げたところでした。

「じゃあ、あいさつもすんだし、帰ろうか」

シヨウが言うのとテツオは笑顔でうなずき、

「そういえば、シヨウちゃん。この鈴っていつ鳴らすの？」

天井の鈴を指差しました。

「あっ、忘れてた。本当は先に鳴らすのかもしれない。とりあえず、今、やっとうか」

シヨウの提案にテツオもうなずき、二人は一緒に綱をつかむと、鈴を鳴らしました。

日曜日の午前中、二人しかいないその場所にカランカランと軽やかな音が響きます。なんだか心が軽くなるような音でした。



神社じんじやからの帰り道かえみち、シヨウとテツオは駄菓子屋だがしやに寄り、アイスキャンデーあいまを買かいました。お店みせの外のベンチそとに座すわって食べ始めはじめます。冷たくて甘いソーダ味あじが今の気持ちいまきもにぴったりでした。

「シヨウちゃん、お祭りまつ、楽しみだねえ」

テツオがにこにこで言い、

「うん。すつごく楽したのみ」

シヨウもにこにこで答えこたえました。

ながくび神社じんじやでは毎年八月二日の夜よるにお祭りまつがあるのです。ただし、このお祭りまつに参加さんかできるのは九歳きゅうさいから十四歳じゅうよんさいまでと決きまっています。大人おとなは参加さんかできません。

シヨウは五月ごがつ生まれ、テツオは六月ろくがつ生まれで、今年ことし九歳きゅうさいになりました。

テツオがアイスを一ひと口かじってから、

「長首姫様ながくびひめさまにも会あえるかな？」

目をキラキラさせながら言いいました。

「うん。会あえると思うおもうよ。うちの近所きんじよのヒロくんは去年きよねんも一昨年おとしも会あったんだって」

シヨウが答こたえると、へえ、とテツオが楽したのそうにうなずきました。



シヨウも長首姫には会いたいとは思ってはいましたが、それよりもお祭りの出店のほうが楽しみでした。チョコバナナにリング飴にヤキソバ、射的に輪投げ。お祭りを体験してきたお兄さんやお姉さんから話を聞くと、とにかく楽しいことがいっぱいだそうです。

「楽しみだなあ……」

二人の声がぴったりと重なりました。あまりにぴったりのタイミングだったので、二人は顔を見合わせ、思わず笑ってしまいました。

シヨウはテツオといつごろから友達だったのか、よくおぼえていません。気が付いたら友達でした。幼稚園に一緒にかよった思い出があるので、出会ったのはその頃なのでしよう。好きなアニメも好きなサッカー選手も一緒でした。

「でもほんとに楽しみだなあ」

シヨウが初夏の青い空を見上げると、テツオも大きくうなずきました。



夏休みが始まり、やがて八月二日がやってきました。その日、シヨウは朝五時に起きて、そわそわしていました。お祭りは夕方四時からなので、こんなに早起きをする必要はないのですが、なんとなく落ち着かないのです。

リビングでいつもよりも三十分も早く朝食を食べていると、おはよう、とパジャマのまのお父さんが現れました。

「シヨウ、ついに今日はお祭りだな」

お父さんがソファに座りながら言い、シヨウはご飯をほおばりながらうなずきました。

「いいなあ、お父さんももう一度いきたいなあ。でもむりなんだよなあ」

お父さんが懐かしそうに言いました。お父さんも昔、お祭りに参加していたのです。

「そこでなシヨウ。ちよっとお父さんのお願いを聞いてくれないか。これをな、ギンタにわたしてきてほしいんだよ」

お父さんが手に持っていた白い封筒をわたしてきました。

「ギンタ君ね、オツケー」

何度もお父さんから聞かせてもらった名前でした。お父さんの親友だそうです。

時間が過ぎていきます。お昼を過ぎたころになるとシヨウはだんだんそわそわしてきました。そして三時になったとき、家のチャイムが鳴りました。

「テツちゃんがお迎えに来てくれたわよ」

お母さんの声。シヨウはウエストバッグを腰に巻き、玄関に行きました。開いた玄関の

向こうではテツオが手を振っています。

「いいわねえ。お母さんも長首姫様のお祭りに行ってみたかったなあ」

お母さんが言いました。お母さんは、この地域で育ったわけではないので大人になるまでこのお祭りのことを知らなかったそうです。

「じゃあ、みなさんのいうこと聞くのよ」

シヨウは大きくうなずき、いつてきます、と外に飛び出しました。



神社に向かう道です。この町の子供たちがぞろぞろと歩いていました。お祭りのときは歩いていくことが、ずっと昔からの決まりのようになっていました。シヨウのお父さんもお祭りのときは自転車などは使わずに歩いていったそうです。

神社の階段をシヨウとテツオは並んで上りました。階段に足を乗せたときから風が吹き始めています。なんと心地好い風でしょう。まるで神社に招かれているような気分です。階段を上りきると、子供たちが神社の敷地に集まっていました。

シヨウたちはお社におまいりをしてから裏の鳥居のほうへと向かいました。鳥居の近くにも子供たちが集まっています。

シヨウとテツオは腕時計を見ながら、そのときを待っていました。三時五十二分です。すると、どこからともなく男の人が現れました。近所の別の神社の神主さんです。すごい優秀な神主さんで鳥居の向こう側と話すごができるといわれています。とはいっても今日は普通の服装なので、ただのおじさんしか見えません。

神主さんは、みなさーん、と子供たちを呼ぶと、

「スマホやカメラなんかは持っていくと壊れますからね。持っている人は私が預かっておいて、帰るときに返しますよー」

注意事項を言いました。それから神主さんは腕時計を見て、

「少し早いですけど、いいでしょう。では皆さん、お祭りを楽しんできてくださいね」

そう言うと、柏手をポンと打ちました。

「さあ、鳥居をくぐってくださいーい」

神主さんの合図で、みんなが鳥居をくぐっていきます。シヨウもドキドキしながらその鳥居をくぐりました。



「わあああ……」

シヨウとテツオは同時に驚きの声をあげました。鳥居をくぐったその場所はすでに夜でした。頭上のヤマザクラの枝から枝には縄が張ってあって無数のちょうちんがぶらさがっています。そんなちょうちんの明りの下、石畳でできた幅二十メートルはありそうな広い参道にはズラズラズラツと出店が並んでいました。チョコバナナにリンゴ飴、ヤキソバ、一口カステラ、かき氷。そんな出店の店員さんたちの姿を見て、シヨウは嬉しくてため息をもらしました。シヨウと同じように今年が初めての参加の子供たちも店員さんたちを見て目を輝かせています。店員さんたちは全員、人間ではありません。河童、鬼、天狗、化け猫などから、正体がよくわからない者たちまでみんながみんな、妖怪やおばけでした。

「さあテツちゃん、まずなに食べる？」

「そうだね、まずはやっぱりチョコバナナじゃない？」

シヨウとテツオはチョコバナナの出店に向かって走り出しました。



「楽しいなあ。それに食べ物もおいしい」

ワタアメを持って歩きながらシヨウがいうと、テツオも大きくうなずきました。テツオの手には切ったメロンを串に刺したものがありません。食べ物はどれも十円から五十円くら

い。いつも口くちにしているお菓子かしと比べくらると、とても安いやす気がきします。シヨウはそろそろおなかなかいっぱいいっぱいになってきていましたが、まだ二百円にひやくえんしか使つかってはいませんでした。すぐくお財布さいふにも優しいやさお祭りまつです。それに甘いあま麦茶むぎちゃがただで配くばられていたりするので、これを飲のむだけでも楽しく過すごせそうです。

歩あるいていると子供こどもたちの喚声かんせいがあがりました。どうやら大道芸人だいどうげいにんが芸げいをしているようです。シヨウたちも集あつまった子供こどもたちの中なかに入はいりました。身長しんちよう二メートル、筋肉きんにくムキムキの赤鬼あかおにがテーブルを前まえに何も無ないところから花はなを出だしたり、子供こどもたちが選えらんだトランプのカードを当あてたりしています。成功せいこうするたびにシヨウも拍手はくしゅをしました。

「じゃあ、次つぎはスプーン曲まげだぞ。とはいっても今日きょうはスプーンがないから、これを私わたしの念力ねんりきで曲まげて見みせよう」

そういうと赤鬼あかおにはテーブルの下したに置おかれた少しさびた鉄てつの棒ぼうを拾ひろいました。ちようど小学校がっこうの校庭こうていの鉄棒てつぼうくらいの太ふとさです。

「ではでは、とくと御覧ごらんあれ。ふん！」

赤鬼あかおにが両手りょうてで棒ぼうを持ちもちました。その腕うでの筋肉きんにくがどんどん堅かたくなっていくのがわかります。そして、ついにメキメキメキツと棒ぼうが曲まがり始めはじめ、子供こどもたちが喚声かんせいをあげました。

「ねえ、シヨウちゃん、あれって念力じゃなくて筋肉パワーだよね？」

テツオが拍手をしながら言い、シヨウはうなずきました。それはそれですごいことです。赤鬼は子供たちに向かって丁寧におじぎをしました。見た目はゴツツイですが、優しいヒトのようです。その姿を見ていたら、シヨウは大切なことを思い出しました。

「そうだ、手紙だ！」

お父さんから預かった手紙をギンタに渡さなければなりません。

シヨウはウエストバッグから手紙を取り出し、片付けをしている赤鬼に近付きました。

「こんばんは。あの、僕、青鬼のギンタ君ってヒトをさがしてるんです」

「えっ、君はギンタの知り合いなのかい？」

赤鬼が驚いた顔をし、シヨウはお父さんがギンタの友達であることを伝えました。すると赤鬼は大きくうなずき、自分についてくるように言いました。



「君がノリの息子さんのの？」

たいやきを焼いていたイケメンの青鬼が言いました。彼こそがお父さんの友達のギンタです。シヨウは、はい、と返事をし、父の手紙を渡しました。ギンタはそれをその場で読

み始め、同封されていた一枚の写真を見てポロポロと涙を流しました。そして、写真をシヨウに見せてくれました。そこには中学生くらいの二人の少年が写っています。一人はシヨウのお父さんで、もう一人はきつとギンタです。ただし人間でした。こういうヒトもいるのです。本当はおばけや妖怪の一族でも子供るときだけは人間として人間の世界で暮らすのです。命の勉強のためだと聞いたことがありました。

「そうだ、君たちにこれをあげよう。お代はいいから」

ギンタがシヨウたちにたいやきをくれました。甘い香りがいかにもおいしそうです。シヨウがたいやきの香りにうっとりしていると遠くから笛や三味線の音が聞こえてきました。

「おっ、姫様のおなりだぞ」

ギンタの言葉でシヨウたちは石畳が敷かれた参道の彼方に目を向けました。大きなおみこしが見えます。周囲にはたくさんの火の玉が舞い飛び、おみこしを照らしていました。

おみこしは八本足の巨大なクモの上に乗っていました。ただクモの頭だけはクモではなく二本の角が生えた鬼のような顔です。

おみこしの周囲には美しい着物を着た女のヒトたちがいました。それぞれ手には楽器を

持っています。

シヨウは息を飲み、近付いてくるおみこしを見つめていました。となりのテツオも口が半開きになっています。

「すごいなあ、なあ、テツちゃん……」

「うん、すごいねえ……」

おはやしのリズムを引き連れ、おみこしが近付いてきます。背の高いおみこしの上に、そのヒトは座っていました。薄い紫色の着物を着ています。このヒトこそが長首姫です。本当の名前は藤首というようですが、昔から長首姫と呼ばれていて、本人もその呼び名のほうがわかりやすいと言っているようです。ここに来た人間たちは姫様と呼ぶのが習わしでした。

ゆつくりと進むおみこしの上、長首姫の首がニルルウと伸び、下にいる子供たちに話しかけました。長首姫は妖怪ろくろ首の姫なのです。もちろん怖い妖怪ではありません。その証拠に話しかけられた女の子たちは、とても嬉しそうです。

長首姫は子供たちと話をしながら進んでいきます。その首は、長いときには十メートル以上も伸びているように見えました。

おみこしが近づいてきます。楽器を持った女のヒトたちもときどき首を伸ばしたりして
いました。このヒトたちもろくろ首なのです。

おみこしを乗せたクモは大きな体であるのに足音がしないので、もしかすると音楽の
邪魔をしないように足音を消しているのかもしれない。

長首姫の顔がはつきりと見える場所までおみこしが近づいてきました。長い黒髪、白い
肌、きりりとした美しい顔立ちからは深い知性を感じます。

長首姫の顔がシヨウたちのほうに向き、シヨウの心臓がコクンと鳴りました。十メートル
ほど先から長首姫の頭がシヨウたちに近付いてきます。

「おお、おまえさんたちは初めてじゃのう。わらわが長首の姫じゃ。よろしゅうな」
よく通る声で長首姫が言い、シヨウとテツオは背筋を伸ばし、

「はい、よろしくお願いします！」

二人で声をそろえました。

「ん、おまえさんは寺田則雄のせがれかえ？」

「はい！ 寺田正一です！」

「うんうん、鼻と眉毛がよう似とるぞ」



なんと長首姫はシヨウのお父さんのことをおぼえていてくれました。長首姫はカカカと笑うと今度はその顔をテツオに向けました。

「ん、おまえさんは……。もうそんなに経つのか。よう来たのう。楽しんどのるか？」

長首姫はテツオの顔を見るとちよつと不思議なことを言いました。テツオとは初対面ではないような口振りです。

「はい、すごく楽しいです！」

テツオが元氣よく返事をし、長首姫が輝くような笑顔を浮かべてくれました。

ではな、と長首姫の笑顔がほかの子供たちのところへ向かっていきます。

「すごい美人だねえ。それに優しそうだね」

テツオがすごく嬉しそうに言いました。とても明るい笑顔です。そんな笑顔の瞳にシヨウは目をとめました。

——あれ？

なんだかテツオの目の色が少し変わったような気がしたのです。シヨウが軽く首をひねると目の前に三味線を持ったお姉さんがいました。お姉さんは首をメートルほど伸ばしています。そしてその首を踊るように揺らしながら、見事な三味線の演奏を聴かせてくれ

ました。テツオはお姉さんの三味線の音に合わせて手拍子をしています。その目が赤く光ったような気がしました。



木でできたテーブルセットに腰を下ろし、シヨウとテツオはかき氷を食べていました。ほかの子供たちもテーブルセットに腰を下ろし休んでいます。頭上のちようちんが風で揺れていました。少し離れたところからおはやしや子供たちのはしゃぐ声が聞こえてきます。

「テツちゃん……、もしかして？」

シヨウがテーブルをはさんで座るテツオの顔を見ながら言いました。

「もしかして、人間じゃなかったの？」

テツオの顔が変わってきています。顔にはうっすらと毛が生え、目の輝きも違います。口を開いたときには牙も見えました。

「てへへ、じつはそうなんだ。やっぱりこの世界の空気を吸うと正体が出ちゃうみたいだね。僕の正体はネコマタなんだ」

「ネコマタ？　ほんと？」

ネコマタとは尻尾が二本ある化け猫です。

テツオが笑みを浮かべ、イスから立ち上がるとポンと宙返りをしました。するとその顔はすっかり猫になっていました。白とグレーの縞模様、アメリカンショートヘアです。

「でも、テツちゃんのお父さんとお母さんは人間だよね？」

「うん。本当の両親に頼まれたんだ。でも僕は人間のお父さんとお母さんも本当の両親だと思ってるよ。それとね、もうひとつ本当のことを言うと、じつは僕の名付け親は長首姫様なんだって。だから一度、ちゃんと会いたかったんだ。優しそうな人で良かったよ」

テツオの打ち明けにシヨウは笑顔でうなずきました。びっくりはしたけれど、ものすごくびっくりしたかというのと、じつはそれほどありません。そんなこともあるんだろうな、とは心のどこかで思ってもいました。

「シヨウちゃん、あんまり驚かないね？」

「うん。テツちゃんがネコマタでも友達なことに変わりはないしね」

「一ミリも嘘のない、本当の気持ちです。」

「うん、ありがとう。ぼくもシヨウちゃんとはずっと友達だから。十四歳のお祭りでお別れになっちゃうかもしれないけれど、ずっとずっと友達だから」

シヨウは笑顔で大きくうなずきました。すると別のテーブルから、すごい、なんていう女の子の声があがりました。見ると三人組の女の子のうちの一人の首が伸びています。どうやらその子も人間ではなかったようです。

そのとき、ヒューと音が鳴り、ドーンと大きな音が響きました。頭上の枝葉の向こうに花火が開いています。

「わあ、すごい！ シヨウちゃん、あっちならもつとよく見えるよ。行こう！」

「うん、行こう！」

二人はイスから立ち上がると走り出しました。異世界の夜風が頬をなでていきます。とてもさわやかな風です。シヨウは今、テツオと一緒にいるこの瞬間を大切にしようと思いました。

総 評

「子どもたちに聞かせたい創作童話」は、「市民の童話に対する理解と関心を深め創作童話への意欲を高めたい」、「作品を通じて子どもたちの夢を育み、美しい心を育てたい」という願いのもとに始まり、今回で第四十七回を迎えました。今回も多くの方々が応募してくださいました。第一部（保育園児・幼稚園児・小学校低学年向けの作品）百九十六点、第二部（小学校中・高学年向けの作品）百二十四点の計三百二十点が北は北海道、南は沖縄県の四十一都道府県から寄せられました。今年は、昨年に比べて応募数が増えるとともに、学生の方からの応募も増えました。若い方々の「子どもたちの夢を育む作品」への創作意欲にも感謝申し上げます。今回の作品もファンタジーや生活体験を基にした童話、民話調の作品など、多様なジャンルがあり、家族愛や友情、共存共栄、希望、自然愛など、聞き手の発達段階にふさわしいテーマの力作ぞろいでした。本コンクールの趣旨を理解していただき、多数の作品が応募されたことをたいへんうれしく思います。

読み聞かせには、「想像力・創造力の発達」、「語彙能力の発達」、「読解力や学習意欲の向上」、「情緒の安定や共感力の育成」、「読み手との信頼関係の強化」など、様々な効果があります。子どもたちは、皆さんの作品を通して、心を育み、やがては豊かな人生を送っていくことでしょう。

さて、今回もすばらしい作品が多く、審査も難航しましたが、

- ① 子どもたちに夢を育み、美しい心を育てたいという願いにかなう童話
- ② 正しく美しい言葉、読みやすい文章
- ③ 独自性（個性的で魅力ある作品）

の三つの観点に照らし、厳正かつ慎重に進めました。その中で、応募された作品について話し合われた内容をお示しいたします。入賞作品の詳細につきましては、各部の選評をご覧ください。

- 第一部の作品には、経験と重ね合わせた共感できる作品が多く、登場人物の心情が丁寧に描かれ、読み手が感情移入しやすい作品が多かった。
 - 子どもたちにわかりやすい文章で丁寧に描かれているので想像しやすく、安心して聞くことができ、物語になっていた。
 - 物語の構成や情景描写の素晴らしさで、物語の中に引き込まれる工夫がされている作品が多かった。
 - ファンタジーの世界を描いた作品では、現実から空想、空想から現実に移行する際に、違和感を与えない工夫がされている作品が増えた。
 - 主題がはっきりとした作品が多く、読後感のよさを感じる作品が多かった。
 - 物語の山場がなく平坦な構成になっていたり、登場人物の心情や行動が描き切れていなかったりする作品が見られた。
 - 物語の内容はよいが、テーマに沿って文章を精選したり、言葉を工夫したりすると、もっと素晴らしい物語になる作品があった。
- さて、昨年は、椋鳩十氏の生誕百二十年で、多くの場所で、椋氏の作品を取り上げるイベントが開催されました。椋氏が残した「感動は心の扉を開く」の言葉のように、今後も皆さんの創作童話が、子どもたちの心の扉を開いてほしいと願っています。
- これからもたくさん作品が寄せられることを期待しています。

入賞作品の選評

《第一部》

特選 「キャベツのなかのちいさなともだち」

- ごはん作りのお手伝いは、子どもにとって楽しく大好きな時間。さきちゃんのように、野菜についた虫を発見したことがあるお子さんもたくさんいることでしょう。経験と重ね合わせて、共感を持って読むことができる作品です。
- 温かい内容にあった優しい文体ですが、必要な情報もさりげなく織り込み、展開もなめらか。会話のテンポもとてもいいです。文章力も高く、読者をすんなりと作品世界に引き込む力を持っています。
- 虫ぎらいのさきちゃんが、お母さんにうながされてあおむしに「モンちゃん」と名前を付けお世話を始めます。最初はこわくて、ぽいっと投げけるように虫かごにいられたさきちゃんが、お世話をする中で、少しずつ愛情を抱いていく過程が、とても丁寧に描かれています。どんな葉っぱが大好きか、居心地の良いお部屋作りなど、読者もさきちゃんといっしょに、「モンちゃん」を観察しているような楽しい気分にならせてくれます。
- さきちゃんにとって大好きな「ともだち」となったモンちゃん。きれいなモンシロチョウに成長できたモンちゃんはこれまでのお礼を伝え、新しい世界に旅立ちます。さきちゃんとモンちゃんの心が通いあい、言葉を交わすラストも明るく温かいです。
- あむしからモンシロチョウに成長する様子もよく分かります。野菜についた虫を育てたいなど、「命」の大切さも育む素敵な作品です。

入選 「どんぐりで友達ができるよ」

- 友達がほしい子だぬきのカン太が、木村先生や子供たちとの出会いを通じて、関係を築き、絆を深めていく様子が丁寧な描写で描かれていた。

- 物語全体が平明な文章で書かれており、低年齢の子供たちにも分かりやすく読みやすい。また、木村先生の思いや
りある行動や言葉がカン太や学級の子供たちを優しく包み込み、読み手も安心して物語を読み進めることができる。
- カン太が、木村先生と再会の日までどんぐりを毎日一個ずつ拾って、家の中に並べていく描写は、待ち遠しい気持
ちやワクワクしている楽しみをうまく表現できていた。また、様々などんぐりの形が集まった描写から待ち焦がれて
いた日がようやく来る期待感も表現できている。
- カン太が子供たちにくぬぎ山を案内する場面は、植物の名前等を教えるということだけではなく、自分が生活して
いる大事な場所を子供たちや木村先生にも知ってほしいという思いや願ひも感じることができた。
- 最後の場面で、木村先生が一旦受け取ったどんぐりをカン太へ返し、育てることを提案したことで、芽を出す頃に、
また、先生や子供たちと会えることが想像でき、希望をもたせる素敵なおわり方となっていた。

入 選 「ちいちゃんとピンクのエプロン」

- 作品全体を通して、ちいちゃんの細やかな心情が丁寧に描かれており、低年齢の子供たちにとっても自分と重ねな
がら読み進めることができる。
- ちいちゃんがどうしてもおどりに集中できない様子やまいちゃんのおどりを素直にほめることができな心
の悩みや葛藤の描写は、ちいちゃんの心情を的確に映し出して、読み手も感情移入しやすい。
- ちいちゃんがお母さんに正直な気持ちを伝える場面は、会話が進むにつれ、ちいちゃんの心の変化や感情の高まり
がはっきりと感じられ、読み手も共感しながら読み進めることができた。また、ちいちゃんの気持ちをしっかりと受け
止めるお母さんの言葉一つ一つも深い愛情に満ちあふれていて、物語を更に温かく魅力的なものにしている。
- 前を向いて新しい気持ちで「おそうじ。パタ。パタ」のダンスをおどるちいちゃんの気持ちや動きが鮮やかに表現され
ているのが印象的だった。
- 作品を通して、自分の気持ちや考えを言葉にして伝える大切さや友情、家族愛など、多様なメッセージが伝わるわ
る内容となっている。

《 第二部 》

特 選 「魚屋になりたかった猫」

- 物語の最後の最後で、お世話になった魚屋の主人も、自分と同じ猫だったのではないかと思わせる表現が、畳みかけるように配置され、この物語の面白さや不思議さを一層際立たせた構成になっています。
- 冒頭の猫が魚屋で働く人間（トラ吉）になっていることに気付く場面では、魚屋の主人との会話により、猫の特徴であるシッポや耳が消えて、手が人間の手になっていることに、徐々に気づいていく様子がテンポよく表現され、読者をひきつけています。
- 「目を光らせて仕入れる、大切な魚」「ほめてくれる。新鮮な魚」の体言止めの表現の繰り返しで、魚を落としてしまったトラ吉が反省している様子がよく伝わる表現になっています。
- 魚屋の主人の「大切な魚に傷がつくだろう。」「魚になんてことをするんだ。」等の会話や、トラ吉が魚を落としてしまった後の魚屋の主人の対応、そして魚屋の夕ご飯の内容等で、魚屋は魚を大事にし、魚をお客様に売ることが大切に行っていることが伝わり、働くことの意味や価値、尊さを感じさせる作品にもなっています。

入 選 「空からのエール」

- 母親を亡くし父と二人暮らしの主人公が、自分の名前が原因で友達との関係が悪化した後、母親の自分に対する思いを知り、自信を取り戻していく構成が、周りの意見に左右されず、自分を大切にしていこうという思いを持たせてくれる作品です。
- 主人公の四年生の女子「雨音^{あまね}」は、どこにでもいる普通の女の子なので、読者にとって自分の周りにいる友達の人という感覚にさせるさりげない設定が秀逸です。
- 雨音に「晴れ」を求めず、友達として雨音に寄り添ってくれるケイの存在が、本当の友達の在り方や物の見方について示唆を与えているのが安心感を与えます。
- 短い会話文が多いため、臨場感を感じると共に、読み手に適度なテンポを与え、一気に読んでしまいたいという意

識を自然に持たせている点に驚かされます。

○ 母親と別れてから六年が経っても、写真や歌声・ピアノ、そしてビデオレターを通して、母親の深い愛情を感じ、それを心の糧にして力強く生きていこうとする主人公のたくましさに思わず引き込まれてしまいます。また、いつもそばにいる父親の優しく温かい心に、読み手も包まれていて感覚にさせる設定が素晴らしいです。

○ お母さんからのビデオレターが、雨音に語りかけるような話し言葉になっていれば、母親との親密で大切な関係が読み手により伝わりやすいと感じます。

入 選 「光の窓 ルチエッタ」

○ 自ら動くことができない主人公が、ハトとの出会いから自分が何をしたいのかを見つめ、勇気をもって進んでいった姿が感動を与えてくれる構成となっていて、読者が希望を秘め新たな一步を踏み出すために、背中を強く押してくれる作品です。加えて、名付け親との運命的な再会が感動を倍増させる工夫がなされています。

○ 話の舞台が、丘の上の家の窓から床の上、壮大な空の世界、美しい湖、そして村と展開する仕掛けが、物語の壮大さを感じさせ素晴らしいです。

○ 「まるで雪のように」「空高くから滑り込むように」「幸せそうに輝いて」など、読み手が主人公のいる世界を鮮やかに想像できる情景描写が多く、物語にどんどん引き込まれていきます。さらに、一文一文が短く、テンポよく読める工夫が効果的です。

○ 光を運ぶという意味の名を持つ窓が主人公であり、そこに大きな影響を与えたのはハト。両方ともに人ではないですが、それぞれが強い願いや相手への思いやりを持っていて、読み手の興味を高めることにつながっています。

○ 一般的に話の内容が変わるときに行われる改行や、一行空けているところが多いです。改行や一行空けは、話が大きく変わる場合に活用する方が、効果的で読み手にも構成が伝わりやすくなると感じます。

入 選 「ながくび神社」

○ 年に一度の「ながくび神社」でのお祭りには、九歳になったら参加できるようになっています。主人公の二人が現実の世界から、祭りの日に鳥居をくぐり異世界に入り、異世界での祭りを楽しんでいる様子が、様々な妖怪の登場や、子供たちが楽しみにしている出店の様子でよく伝わる作品です。異世界と現実世界がどこかつながっているのではないかと思わせる物語の展開が素晴らしいです。

○ お父さんの手紙を渡すように頼まれた「ギンタ」の存在や、主人公ショウが言った、友達の手紙が「ネコマタでも友達なことには変わらない」の表現などから友情の素晴らしさを伝える作品にもなっています。

○ 書き出しの七月初めの初夏の表現や、終わりの「異世界の夜風が頬をなでていきます。」の表現が、登場人物の心情をよく表す情景描写となっています。

○ なぜテツちゃん人間に育てられたのかは命の勉強のためだということ、良く伝わりますが、しかし、祭りに参加できるのが、なぜ十四歳までなのかについての説明はありません。その説明の仕方によっては、異世界と現実とのつながりをより感じさせることも可能ですし、なぜ、息子に手紙を持たせたのかという父親の心情などから、より友情を感じさせる作品にもなりえたのではないかと思われれます。

「第47回 子どもたちに聞かせたい創作童話」募集要項

子どもたちの夢をはぐくみ、美しい心を育てたいという願いのもと、「子どもたちに聞かせたい創作童話」を募集いたします。

- 1 **応募資格** 高校生以上（16歳以上）の方でアマチュアに限る
- 2 **作品の種類** 創作童話、体験談、地方に伝わる民話に題材を得た作品などの「子どもたちに聞かせたい話」
- 3 **応募規定**
 - ☆ 第1部 保育園児、幼稚園児、小学校低学年向けの作品
400字詰め原稿用紙（縦書き） 10枚～15枚
 - ☆ 第2部 小学校中、高学年向けの作品
400字詰め原稿用紙（縦書き） 15枚～20枚
 - ☆ 表紙は枚数に含めません。各ページにページ数を記入してください。
 - ☆ 原稿はA4判の400字詰め原稿用紙を使用し、右肩をとじてください。（ワープロ原稿も可）
※ワープロ・パソコン原稿は、A4横位置で20字×20行縦書きで印字すること
 - ☆ HB以上の濃い鉛筆か黒インクまたは黒ボールペンを使用すること
 - ☆ 作品は自作未発表のほかの童話賞等へ応募中の作品でないものに限り、（公募で入賞した作品等の内容を加筆、訂正した場合も応募できません。）
 - ☆ 応募は、各部につき1人1作品に限り、文体は自由です。
 - ☆ 表紙に、第1部・第2部の別、作品の題名、住所（郵便番号も記入）、氏名（ペンネームの場合は本名も書き添えること）、性別、年齢、職業（学校名）、電話番号、お持ちの方はメールアドレスを記入してください。
 - ☆ 人名、地名等の固有名詞には読み仮名をつけてください。
 - ☆ 民話、伝説等を題材とした場合は、その出典を明示してください。
 - ☆ 応募作品は返却いたしません。
 - ☆ 応募作品の著作権は応募者に帰属。主催者は入賞作品を冊子にまとめる権利を有する他、ホームページ上で作品集を公開します。
 - ☆ 作品選考に関するお問い合わせには一切応じられません。
- 4 **応募の締切** 令和7年9月12日（金） 消印有効
- 5 **選考委員（50音順・敬称略）**
 - 加峯 美由紀 （鹿児島市立草牟田小学校長、鹿児島市学校図書館協議会会長）
 - 久保田 里花 （児童文学作家、椋鳩十研究家）
 - 小山 陽子 （鹿児島市立図書館図書係主幹兼図書係長）
 - 松久保 鉄也 （鹿児島市立明和小学校長、鹿児島市国語部会長）
 - 峯元 済年 （鹿児島市立花野小学校長）
- 6 **入選者発表** 令和7年11月下旬
かごしま近代文学館かごしまメルヘン館ホームページ上にて発表します。
結果通知は、入選者のみとさせていただきます。
- 7 **表彰式** 令和8年2月22日（日）
- 8 **賞**
 - ☆ 特選（各部1編）…賞状及び楯、賞金5万円
 - ☆ 入選（各部3編）…賞状、賞金3万円
 - ☆ 佳作（各部数編）…賞状
- 9 **主催** 鹿児島市、鹿児島市教育委員会、公益財団法人かごしま教育文化振興財団

応募状況

■ 応募総数

第1部	196点
第2部	124点
総数	320点

■ 年齢別応募状況

部門別	第1部	第2部	合計
16～19歳	55	2	57
20～29歳	3	3	6
30～39歳	15	6	21
40～49歳	22	16	38
50～59歳	23	22	45
60～69歳	36	38	74
70～79歳	26	24	50
80～89歳	8	6	14
90歳～	1	0	1
不明	7	7	14
合計	196	124	320

■ 都道府県別応募状況

都道府県	応募数	都道府県	応募数	都道府県	応募数	都道府県	応募数
北海道	2	東京都	87	滋賀県	3	香川県	1
青森県	3	神奈川県	16	京都府	7	愛媛県	0
岩手県	0	新潟県	3	大阪府	25	高知県	2
宮城県	3	富山県	1	兵庫県	13	福岡県	14
秋田県	0	石川県	1	奈良県	2	佐賀県	0
山形県	3	福井県	1	和歌山県	2	長崎県	2
福島県	1	山梨県	0	鳥取県	2	熊本県	0
茨城県	5	長野県	3	島根県	1	大分県	1
栃木県	2	岐阜県	8	岡山県	2	宮崎県	1
群馬県	1	静岡県	4	広島県	1	鹿児島県	43
埼玉県	10	愛知県	20	山口県	4	沖縄県	1
千葉県	16	三重県	2	徳島県	1	その他	0

選考委員

(五十音順)

- 加 峯 美由紀 氏 (鹿児島市立草牟田小学校校長、鹿児島市学校図書館協議会会長)
久保田 里 花 氏 (児童文学作家、椋鳩十研究家)
小 山 陽 子 氏 (鹿児島市立図書館図書係主幹兼図書係長)
松久保 鉄 也 氏 (鹿児島市立明和小学校校長、鹿児島市小学校国語部会会長)
峯 元 濟 年 氏 (鹿児島市立花野小学校校長)

表紙絵・さし絵

(五十音順)

- 井 上 周一郎 氏 (鹿児島市芸術文化協会会員)
上 村 比登美 氏
黒 木 奈 央 氏
中 間 有 紀 氏
榑 本 容 好 氏 (鹿児島市芸術文化協会会員)

「子どもたちに聞かせたい創作童話」

第 47 集

発行 令和 8 年 2 月
編集者 鹿 児 島 市
鹿 児 島 市 教 育 委 員 会
公益財団法人かごしま教育文化振興財団
鹿 児 島 市 城 山 町 5 番 1 号
TEL (099)226-7771
印刷所 (株)あすなろ印刷
鹿 児 島 市 城 西 2-2-36-205
TEL (099)214-3757
